

Studies in Critical Rationalism

2013

Vol. 5, No. 2

日本ポパー哲学研究会事務局機関誌編集部

(2013 年 12 月号)

CONTENTS

<投稿論文>

方法論的個人主義という幻想	篠崎 研二	1
ミラーとバートリーの争点とポパーの「非合理的理性信仰」について	立花 希一	6
プラトンをかじる	山根 正気	10

<第 24 回年次研究大会シンポジウムを終えて>

仮説の反証を利用して新知識をうまく獲得することができるのはどのようなときか: C・S・パースの理論に着目して	村中 達矢	14
--	-------	----

<連載>

対話によるポパー入門(6)	蔭山 泰之	25
---------------	-------	----

<その他>

電子書籍ファイル作成の便宜を図るためのガイドライン		41
訂正	小河原 誠	42

<書評>

ラフェ・チャンピオン著、小河原誠訳『ガイドブック『ヒストリシズムの貧困』』	徳丸 夏歌	43
ポパー哲学の教育学への応用	小河原 誠	46

<追悼>

碧海純一先生のご逝去と追悼シンポジウムの報告	嶋津 格	54
------------------------	------	----

2013 年度会員総会議事録		56
----------------	--	----

<<投稿論文>>

方法論的個人主義という幻想

篠崎研二

方法論的個人主義をめぐってどんな議論がなされてきたのか調べているうちに、”*Modes of Individualism and Collectivism*”[1]という著作の存在を知った。これは1950年代にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで行われた議論をまとめたものらしく、ハイエク、ポパー、ゲルナー、ワトキンス、アガシ、ゴールドシュタイン等の論者による論文集である。これを読んで、あらためて、方法論的個人主義は致命的な問題を抱えていると感じたが、さらにそれに対する批判論にも混乱があると思った。

観察言語なのか、理論概念なのか？

すでに指摘したように、ワトキンスの方法論的個人主義は全くの心理主義に陥っている。たとえばワトキンスはこう言う。

物質の塊は知覚する人が誰もいなくても存在するが、誰も請求しない価格や、誰も言及しない規律や、使う人など誰もいない道具などは存在しない。この自明な事実から、社会学者は社会事象を説明するにあたり、諸個人の心理に還元するところまで行くべしという方法論的原理を導出する。

複雑な社会状況の理解は、諸個人の性向、考え、そして諸関係から常に導出される。

物理的な物は知覚されなくても存在するのに対し、社会的な「事物」、たとえば法律、価格、首相、配給手帳などは人々の態度によって作られるものである。しかし社会的な事物が個人の態度によって形成されるのであれば、その形成は個人主義的に説明されなければならない。([2], p.729)

しかし「自明な事実」からそんな方法論原理など導出できない。それが言うのは社会現象の観察言語は諸個人の行為だ、ということだけである。ワトキンスは方法論的全体主義(ホーリズム)を特徴づけて「社会システム全体に適用される、独自の巨視的な法則と、(b)全体のなかでの諸個人の立場(または役割)についての記述、とからそれらを導出することによって説明」([2], p.729)することだとしたが、そのような「記述」だつてつまるところは諸個人の行為を記述する言語によって表現されるのだろう。つまり、「自明な事実」はホーリズムを否定したりしないのだ。だから方法論的個人主義が何か意味ある主張であるためには、「諸個人の活動」を何か限定しなければならないのである。そこで登場するキーワードが、ヴェーバーの言う「主観的意味を持たせた行為」であり、それに立脚した「理念型」である。ワトキンスははっきりと諸個人の心理的概念だと言って限定している。

そこで問題は、はたしてそうした諸個人の心理や性向をベースとした理論的概念、ワトキンスの言葉を借りれば「個人主義的理念型」が、社会現象を解明する道具として十分に適切なものか、ということになるのである。

ゲルナー及びゴールドシュタイン—ホーリズムの擁護論

ゲルナーやゴールドシュタインなどのホーリスト派は全く不十分だという。

ゲルナーは特に、諸個人が全体論的な概念を持っていて、その影響を受けて行動していることを強く指摘した。その例にド・ゴール将軍の行為がいかに

彼の「フランス」という観念に鼓舞されていたかを指摘する。その観念たるや、実際のフランス人とはほとんど関係ないのである。ホーリスティックな観念が個人の行為に影響することから、さらに一般化して、社会現象の因果関係においても、それは常に下位の要素(個人)を原因としているとは必ずしも言えず、因果関係の連鎖にはホーリスティックな概念や制度が、下位にある個人の行為の原因になることを指摘する。因果連鎖のいわば一方向性の仮定が、個人主義者が暗黙のうちに犯している根本的な誤りだとするのである。

ゴールドシュタインは人類学における機能主義を、方法論的個人主義への反証例として挙げる。社会現象は、社会集団の存続などの機能や目的から理解することができ、それは諸個人の心理や意図からは独立しているというものである。人類学における機能主義に依拠した批判は、1996 年出版の *"Philosophical Foundations of the Social Science"* (Harold Kincaid, Cambridge Univ. Press) にも登場しており、いわば定番の批判となっているようである。

アガシの制度主義的個人主義

ワトキンスの方法論的個人主義は、やや心理主義に傾き過ぎており、ポパーともややずれがあったように私は思う。ポパーの制度主義的個人主義は制度や組織の相対的な自律性をもっと考慮に入れていたはずだ。その点、アガシの論文 *"Methodological Individualism"* ([1], p.185) では *"Institutionalist"* の側面が強調されているように見え、過多の心理主義が修正されるのではないかと期待したが、それは全く裏切られる。それにその議論はゲルナー、ゴールドシュタインとワトキンスとのあいだで戦わされた論点とはほとんど無関係で、社会学に一種の分類学を提供するものだったのである。

アガシは二つの論敵を想定する。ひとつはもちろんホーリストであり、その主張の要は、「全体が存在

し、かつ全体それ自身の関心と目的を持つ(テーゼ4) ([1], p.186)」だそうであるとする。アガシのもう一つの論敵は「心理主義的個人主義」である。それは社会現象はすべてみな個人の心理によって説明されなければならないと考える。

ホーリズムの思想が引き起こす最大の問題は、集団の独自の利益と、その集団に属する諸個人の利益との関係がどうなっているか ([1], p.190)、ということになるそうだが、私にはそもそもテーゼ4が理解不能である。「全体が個人の目的とは区別されるそれ自身の目的をもつ」というのはまだわかる。組織の目的とそれに属する個人の目的が必ずしも一致しないことはそう珍しくはないことだからだ。しかし、「全体(組織)がその構成員からは独立した関心や意思を持つ」とはどういうことなのか、それはたとえばどんな経験的事態を指すのか、私には理解も想像もさっぱりできないのである。たとえば多数決による組織全体としての意思決定であろうか? しかしこれは明らかに構成員の意思と無関係ではない、その関数であるにすぎない。ありうるとすれば集団精神とか、ヘーゲルの時代精神のような、神秘的概念しか想像できない。そしてそんなものなら論争のホーリズム側の当事者であるゲルナーもゴールドシュタインも認めていない。先の引用箇所 ([1], p.190) に続けてアガシは4つの「経験的事例」らしきものを列挙するが、これらは「ホーリズムの名のもとにどんな主張がなされているか」という例の羅列に過ぎず、テーゼ4の経験的事例でもなければ、その思想の論理的帰結を示すものでもない。

心理主義的個人主義のほうは、人間の心理的構成は永久不変のものと考えから、社会の変化や発展は物質的環境の変化にもっぱら起因することになるそうである。その致命的な弱点は社会諸制度の違いを心理学的に説明できないことだそうである。またホーリズムと心理主義的個人主義のどちらの考え方に従っても、「人々が意識的に組織を改革する」という行為は説明できないことになるそうだ。ホーリズムによれば組織のどんな変化でも、それが衰

退であれ成長であれ、それは生来の性質なのであり(ここで初めてテーゼ4の論理的帰結らしきものが登場するのだが、なぜこうなるのかさっぱり理解できない)、心理主義的個人主義によれば、組織の改革というのは、諸個人の合理的・目的意識的行為の意図せざる帰結にすぎず、組織それ自体というものは存在しないからだそうである。

私はこんな間抜けなことを言うホーリストも個人主義者もどこにもいないと思う。だからアガシはありもしない主張、存在もしない論敵への批判をその論文の目的としているのである。ゲルナーもゴールドシュタインもこんな主張はしていないし、それに、ワトキンスとの論争で争われた論点の最も重大な部分、ホーリスト的な概念抜きに歴史の理解や説明は可能かという論点には何の視点も提供しえないではないか。

こんな次第でアガシは論敵であるホーリズムと心理主義的個人主義を限りなく薄ら馬鹿のように描いたうで、自らの立場、つまり制度的個人主義を主張するのだが、論敵のレベルを限りなく引き下げたのにつられて自説のレベルも下げてしまった。それはアガシ自身が引用したラッセルの言葉「組織はそれに合わせて人間を形作り、そして人間は組織を変革する」という、間違っていないがごく当たり前のことに尽きる。それを制度主義的個人主義(Institutinalistic individualims)と呼んだところで、いかなる社会科学的貢献をするというのか？

それに、制度主義的個人主義はポパーやアガシの専売特許ではなく、ヴェーバーの思想が初めからそうだったのだと私は思う。ヴェーバーは『社会学の原理』や『理解社会学カテゴリー』などの後半部分でゲマインシャフト、ゲゼルシャフト、アンシュタルトといった概念で、組織(制度)について、そしてその個人との関係についてうんざりさせられるほど論じているからだ。

アガシはヴェーバーの立場が制度主義と個人主義のボーダーライン上にある([1], p.204)とみなしているのだが、以下の論評には私は目を疑うばかり

ない。

それ(ヴェーバーのアプローチ)は、諸悪がある目的を持った行為の意図せざる帰結だという説明はできるが、目的意識を持った組織(制度)の改革を扱うことはできない。それは組織(制度)についてははっきりと語っていないからである。・・・その理由は思うに、テーゼ4を、つまり組織(制度)が存在するのなら、それは独自の目的と関心と運命を持っていると考えているからだ。([1], p.204~205)

しかしヴェーバーはゲゼルシャフトを構成する人々が、意識的にその関係を、つまりゲゼルシャフトという機関を変えていく過程を、たとえば以下のように描いている。

結社のなかでゲゼルシャフト関係にある人々は、諸定律を新しいゲゼルシャフト形成行為によって意識的に変えることができるし、あるいは彼らは、新しいゲゼルシャフト行為をしないでも、諸定律の「意味」の現行の平均的な解釈を変えることによって、またとくに状況を変えることによって、行為に対するその実践的な意味の性質を変えることができる(『理解社会学のカテゴリー』、岩波文庫、49～50 ページ)

こうなると、アガシは本当にヴェーバーを読んだことがあるのだろうかとすら疑いたくなる。

制度主義的個人主義は心理主義を脱していない

方法論的個人主義は「制度主義」をその形容詞につけたところで心理主義を克服してはいない。諸個人が制度や他者に対して、何らかの意図をもって働きかけをしたとする。当然その反作用というか帰結が生じ、それによって諸個人は新しい環境下におかれることになる。そこで諸個人はその新しい環境を自分なりに把握した上で次のアクションを外界、つまり制度や組織や他者に対して起こす。そのやり取りの連鎖によって生じる社会法則にしか、方法論的個人主義は適用できないのである。

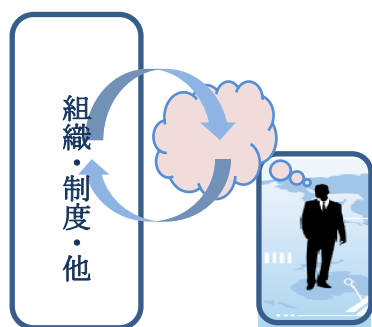


図1個人主義ルート

例を挙げて説明しよう。ヴェーバーは、人間の社会的行為の理念型のひとつである「目的合理的行為」を法則化したものが経済法則であるとし、その例として「悪貨は良貨を駆逐する」といういわゆる「グレシャムの法則」をあげる。

（『社会学の根本概念』、p.18）確かに、諸個人が悪貨であるか良貨であるかを区別する判断を行った上で、良貨を蓄えておく方が得策であるという合理的判断をするだろうから、この法則は確かに個人の「目的合理的行為」の帰結として説明できるようだ。価格決定のメカニズムにしても、需要者の安く買おうとする行為と、供給者の高く売ろうとする行為の帰結として理解できるだろう。

ワトキンスはケインズを持ち出した。つまりその経済理論は「消費性向」、「流動性選好」、「将来利益の期待」といった諸個人の認識とそれにもとづく目的合理的行為にその基礎を置いているのではないか、という次第だ。つまり方法論的個人主義は、常に諸個人の置かれた環境についての自己認識、つまりヴェーバー言うところの「主観的意味の把握」にもとづく行為が生み出す法則性にその適用は限られているのである。

しかし、社会法則はそのようなものだけではない。環境に対する諸個人の行為がある社会法則として帰結するが、それは諸個人の心理、主観的意味を経由することなく作用するものもまた多いのである。（図2）

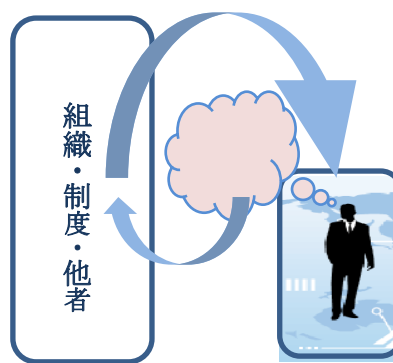


図2 ホーリズムルート

たとえば「比較優位の原理」という極めて古典的な経済法則である。競合するA社とB社の2つの同業の中小企業があり、A社はB社よりもいつも生産性が低く、収益が少ないでしょう。その原因を探ろうと思って、両社の社員の働き振りを比べてみたところ、A社の社長は多才で有能なので、自分が他人よりも得意なことはなるべくみな自分がやってしまうのに対し、B社では社長は経営管理に専念し、社員は自分が最も得意な業務に従事していた。ただ、どちらの会社の社員も、特別な考えもなくそのような分業をやっているのである。比較優位の原理を知る人はA社の生産性が低い理由をすぐに理解するはずである。つまりこの理解にとって、社長や社員の行為の主観的意味、つまり動機を知ることなど不必要なのだ。

ケインズ経済学にも同様の例はいくらでもある。たとえば乗数効果を考えてみよう。これは諸個人が何か商品を買う際のその主観的意味とは全く無関係に生じる現象である。これにかぎらず、マクロ経済学の法則にはこのようなものがいくらでもある。

ワトキンスは、方法論的個人主義が適用できない例のひとつに、確率的な状況、つまり人々の偶然的で予測不能な行動が、規則的で予測可能な結果をもたらす場合をあげた。たとえば1000人の人が正方形のホールの中心にいて北を向いている。出口は東側と西側に一つずつあれば、およそ500人が東出口から、他の500人が西出口から出ていくだ

ろう。この現象は諸個人の東好みや西好みといった心理の違いに起因するものではない。もうひとつの例としては、人々の神経系の物理的接触が知的判断を飛び越えて、反射的な、ある意味では適切な体の反応を引き起こす場合である。([3], p.108-9)

このワトキンスの言明から明らかなことは、方法論的個人主義は、社会法則がその影響を個人に及ぼすにあたって、個人の心理や主観的意味を経由しないという場合には適用できないことをはっきり認めているということである。あきらかにワトキンスは上記の例によって、実はそのようなタイプの社会法則は存在するとしても瑣末なものだ、と示唆しているのである。しかし既に見たように、極めて重要な経済法則がそのような範疇に収まらず、それらは、ちょうど自然法則と同じように、社会のダイナミクスを研究することにより、初めて認識されるのである。

かくして我々は、ホーリズム対個人主義の論争に結論を出す地点に至ったのである。ワトキンスによるホーリズムの定義を思い出そう。

諸個人の行動は (a)社会システム全体に適用される、独自の巨視的な法則と、(b)全体のなかでの諸個人の立場(または役割)についての記述、とからそれらを導出することによって説明されるべきである、と主張する([3], p.729)

私はホーリズムのこの定義の方がアガシの「全体はそれ自身の意思と利害をもつ」などよりはるかに明快だと思う。人々が社会を構成することによってはじめて新しい社会法則が出現し、それが社会を構成した人々の意図はもちろん、いかなる心理とも無関係に生じたものであり、かつそれに支配されていることを知るとき、人々はそこに「集団は諸個人の単なる総和ではない」とか「諸個人を超えた存在である」などという印象を、すなわちホーリズムの観念を抱くようになるのではないだろうか？そして今までの考察からわかったことは上記の a)、b)があてはまる場合があるということである。このことをもってホー

ーリズムと表現することが正しいかどうかは別にして、方法論的個人主義の妥当性が失われたことははっきりしたと思う。

方法論的個人主義の要は、諸個人が他の諸個人や制度や組織に対してどのような心理、主観的意味を抱くかということにあった。この点では批判者たちも、同じ土俵のなかにいたのではないかなと思う。ゲルナーなどはこのやり取りにおいて、ホーリスティックな概念が不可欠だという点を強調した。それはそれで意義のある議論だろうとは思いますが、方法論的個人主義を単に論駁しようというのであれば、ホーリズムルート(図2)の存在を指摘することが最も簡単ではなかったかと思う。しかし彼は同じ個人主義ルート(図1)の枠内でのやり取りにおいて、ホーリスティックな概念が不可欠であることを主張し続けたのである。

アガシも個人主義ルート(図1)しか考えていなかったのではないかな？そしてこのことがあの奇妙なターゼ4に至った原因ではなかったかと思う。というのは、個人主義ルートの枠組みの中で、方法論的個人主義、つまり、制度や組織は諸個人との合意に基づく機関だ、という主張に真っ向から対立するホーリズムを言おうとすれば、それは「制度や組織はそれ自身の意思と利害を持つ」という主張にならざるを得ないだろうからである。

収まらぬ混乱

方法論的個人主義にはさらにまだ二つの混乱の要素がある。第一は、理論的概念の位置づけに関わるもので、理論的概念は個人の行動を表現する記述の簡略表現にすぎず、つまり観察言語に還元できるのか、という問題である。方法論的個人主義はこの立場を取り、従ってその考え方は必然的に還元主義となった。ホーリズム派は還元は不可能だと主張したのだが、この論争は先にも触れたように言語哲学論争の色彩を帯びていつてしまったように見える。

第二は、科学における説明とはなんなのか、とい

う問題である。ヴェーバーの理解社会学とは、馴染みのない現象を、慣れ親しんだ現象に結びつける（あるいは還元する）ことによってこの世界を理解させる、という古くからある思想の系譜に属するものであり、慣れ親しんだ現象を人々の動機としたから、心理主義となってしまった。これはディルタイにまで遡る極めて古い思想なのであり、わが国では大塚久雄にも受け継がれた。しかしこの共感による理解のし易さはその学問の科学性とは何の関係も持っていない。

これらの問題も含めた包括的な議論は、近刊予定の『方法論的個人主義という幻想—マックス・ヴェーバーの社会科学方法論』（Amazon、Kindle direct Publishing）で詳細に行う予定なので、興味ある読者はこれを参照されたい。

☆☆

ミラーとバートリーの争点とポパーの「非合理的理性信仰」について

秋田大学
立花希一

ミラーの著書、*Critical Rationalism: A Restatement and Defense*, Open Court,

1994、で扱われている問題のひとつに、バートリーの汎批判的合理主義（CCR）に対して提出されたさまざまな批判についての批判的検討がある。それが、『批判的合理主義研究』2013, Vol. 5, No. 1 に掲載された小河原誠氏訳の「第4章 包括的に批判的な合理主義——ひとつの評価——」である。具体的には、4.3. CCR への批判、a. から f. までである。しかも、a. から e. までについては、CCR 批判に対する返答の仕方はバートリーとミラーとは異なるとはいえ、すべてバートリーを擁護

引用文献

[1] *Modes of Individualism and Collectivism*, Heinemann Educational Books (1973)

[2] J.W.N. Watkins, "Ideal types and historical explanation", *British Journal for the Philosophy of Science*, 3, p.22, 1952(初版); *Readings in the Philosophy of Science*, ed. Feigl and Brodbeck, New York, 1953(第二版)

[3] J.W.N. Watkins, "Historical explanation in social sciences", *British Journal for the Philosophy of Science*, 30, p.104, 1957

する議論が展開されているのは明白である。ミラーも次のように発言しているからである（傍点引用者）。

a. から e. に対するバートリー自身の返答は、わたくしの返答と同じではなかったけれども、彼は、わたくしがこれまで述べてきたことのほとんどに同意してくれただろうとわたしは信じていることができる。（この信念は、おそらくかろうじて批判可能な言明であって、わたくしが語ったことはすべて CCR の主要な考えと両立するし、わたくしが語ったことのどれひとつとして、合理性の問題に首尾一貫した解決策を与えるという問題に対して CCR が提出した解決策を追い払うわけではないという事実から——適切なほかの仮定が与えられれば——帰結することなのだ）。

しかしながら、ミラー自身が最後に提起する批判 f. だけは、それ以前の a. から e. までの批判とはまったく異なる種類の批判であって、バートリーを擁護するものではまったくなく、まさにミラーによるバートリー批判になっている。この点について、ミラーは、次のように述べている（傍点引用者）。

しかし、わたくしが最後に提出する批判は、まったく異なる種類の批判である。わたくしは、バートリーだったらそれを受け容れたらと確信しているわけではない。

すなわち、批判 f.こそが、ミラーからみれば、まさにミラーとバートリーの争点、あるいは二人の間の相違点を示すきわめて重要な箇所だということになるだろう。それでは、批判 f. の議論によって、明確に浮かびあがってくるミラーとバートリーの相違点、争点はどこにあるのだろうか。

それは、ミラーは、真理の探究において決断〔決定〕がどうしても必要だとみなしているのに対して、バートリーは決断〔決定〕を非合理だと呼んで、それを消去しようとしている点にあると思われる。決断〔決定〕の必要性の指摘は、ミラーの次の発言から読み取れるだろう。

そうした決断〔決定〕なしでは、基礎言明の場合においてばかりでなく、われわれの知識全体を通して、批判は無力（impotent）となり、ただ、これはあれによって批判されたという趣旨のメタ言語的報告のなかに批判の痕跡を残すだけになってしまうのだ。

ミラーは、決断〔決定〕がなければ批判は

インポだと言い切っている¹。しかも、「そうした決断〔決定〕——これは、いつでも、われわれが真と考えるものに照らして下されるのだが——は、それ自体が、批判、訂正、さらには撤回にさえ開かれている」と述べているように、ミラーによれば、決断〔決定〕自体が、批判に対して開かれており、訂正や撤回の可能性がある以上、その決定は非合理ではなく、したがって、バートリーのように、決断〔決定〕が非合理だからという理由で決断〔決定〕を消去する必要などまったくないと考えている²。

ミラーは、「そうした決断〔決定〕が非合理

¹ 決定の必要性に関しては、科学者と科学哲学者で異なるだろう。科学者は科学研究を推進する当事者であり、研究過程の中で、暫定的にせよ、理論・観察・実験結果の間で競合する複数の選択肢の中からどれを選択して、研究を進めるかの決定が不可欠であるのに対し、外部観察者である科学哲学者にとっては、ある意味、メタ言語的報告で十分かもしれないからである。しかし、科学者だけではなく、科学哲学者や普通のひと、選択・決定の場面に直面する場面も当然、生じる。一例を挙げれば、われわれは何を教育すればいいのだろうか、何を学べばいいのだろうかといったことを考える場面で。

因みに、ミラーの議論は、ヴァルター・カウフマンの「決定嫌い・決定忌避（decidophobia）」とも深く関係すると思われる。この言葉は、「自律に対する恐れ（fear of autonomy）」を意味するものとして、カウフマンが造語したものであり、この用語は、まさに、「自己決定」、「自律」と深い関係にあるのだが、ここでは立ち入らない。Walter Kaufmann, *Without Guilt and Justice: From Decidophobia to Autonomy*, Peter H. Wyden, 1973.

² 他方、バートリーは、決断〔決定〕、同意（agreements）、約束事（conventions）、受容（acceptance）、正当化（justification）を同列に並べ、それらすべてが不要だとしてその消去を提案している W. W. Bartley, III, *The Retreat to Commitment*, Open Court, 1984, p. 215. 正当化にも言及されていることは注目に値する。バートリーは、正当化の消去とともに、そこで列挙した決断〔決定〕、同意、約束事などすべてを消去しようとしているのだ。

だなどという問題はまったく存在しない³」と断定し、CCR の創案者〔バートリー〕がそうしたこと〔そうした決断〔決定〕が非合理だなどということ〕を示唆しているのを見ることは驚きだ」という。

そこで、批判 f. の最後の結論として、決断〔決定〕が恣意的になる恐れはない理由を示した後、ミラーは次のように締め括っている（但し、これは、あくまでもミラーによる、バートリー解釈であって、バートリーがその解釈を受け容れるかどうか定かではないし、しかも、先に引用したミラーの「バートリーだったらそれを受け容れたらと確信しているわけではない」という言葉からもわかるように、その旨、ミラー自身も予め断っている）。

バートリーは真理に関心をもち、正当化を軽蔑していたにもかかわらず⁴、彼は、真理を探索す

³ この文を、小河原氏は、「そうした決断が非合理であることに疑問の余地はない」と、決断が非合理であるという主張をしているように訳されている（39 ページ右段 2 行目）が、疑問の余地がないとみなしている主体が誰だと判断して訳出されたのだろうか？（もしかすると、訳者の小河原氏が決断は非合理だとみなしているのかもしれない）。そもそも、There is no question of の用法は、疑問の余地がない（no doubt）という意味ではなく、それとは正反対で、そのような可能性はない、論外だ、そのような問題は存在しないという意味である。例文を挙げよう。There is no question of my marrying her. は、「私が彼女と結婚することに疑問の余地はない」ではなく、その反対で、「私が彼女と結婚するなんてありえない」という意味である。したがって、上記の文をくだいた表現にすると、「そうした決断が非合理だなんてありえねえー」となるだろう。

⁴ 「にもかかわらず」と訳した部分の英語は、for all で、その意味は、in spite of あるいは、despite のような逆接のはずであるが、小河原氏は、all を強調だとみなしたようで、「していたために」と順接で訳している（39 ページ右段 21 行目）。これでは意味がまったく通じないと思われる。例文

るにあたってわれわれの下す正当化不可能な（unjustifiable）決断〔決定〕を非合理と呼ぶことで、まさに最後の瞬間に物怖じしてしまったように思われる。

要するに、正当化不可能だとしても、批判に対して開かれていれば合理的だと仮定するのであれば、正当化不可能な決断〔決定〕を行なったとしてもその決断〔決定〕が批判に対

を挙げよう。For all the sweat and blood the situation appeared unchanged. は、「汗と血の努力をしたにもかかわらず状況は変わっていないようにみえた」の意味であるが、それを、「汗と血の努力をしていたために状況は変わっていないようにみえた」と訳したら、意味が通じるだろうか？ミラーの文について言えば、正当化（justification）は合理性とは無関係だとして、バートリーが正当化を軽蔑するならば、正当化不可能な（unjustifiable）決断〔決定〕を、それが正当化不可能だからといって、「非合理」と呼ぶ必要はまったくないはずである（しかし、ミラーによれば、バートリーは、驚いたことに、こうした決断〔決定〕を「非合理」と呼んでしまった。ああ！）。だから、ミラーは、「にもかかわらず」という逆接を用いているのだ。この注と注 3 で指摘した誤訳については、原著者のミラーに確認したところ、私の解釈が正しいとのことであった（2013/09/04（水）17:11 の電子メール）。

Dear Professor Tachibana

Thank you so much for your letter, and for your comments on Kogawara's translation. It seems to me that you are absolutely right.

I wonder if you would be prepared to advise Professor Kogawara gently about the mistranslations, so that a small corrigendum can be inserted into the next number of Studies in Critical Rationalism. Since you understand what I was trying to say, it makes more sense for you to explain the problems to him in Japanese than for me to try to explain them in English...Kind regards - David

正誤表の掲載要依頼では重要な論点が看過されてしまうと判断し、この拙稿の注に組み込むことにした。因みに、信仰主義（fideism）ではない、信仰（faith）の尊重がありうるのだが、バートリーはこの点を看過しているように思われる。

して開かれていれば、それを非合理と呼ぶ必要はまったくないはずだというのが、ミラーの指摘であり、しかも、バートリーなら、当然、そう主張してしかるべきなのに、バートリーは、われわれの下す正当化不可能な決断〔決定〕を非合理と呼んでしまったので、最後の最後のところで、バートリーは気後れしてまったと評さざるを得なかったのだと思われる。

さて、ここでのミラーの批判的考察は、ポパーの「非合理的理性信仰 (irrational faith in reason)」の解明にきわめて有効だと思われる。ポパーの「非合理的理性信仰」をバートリーが非合理的信仰主義 (fideism) だとみなし、まさにこれを消去しようとしたことはよく知られている。ミラーの議論によれば、上述の決断〔決定〕と同様、信仰 (faith) も批判に対して開かれているならば、それが正当化不可能だからといって、その信仰を「非合理だ」と呼ぶ必要はなくなるはずである。非合理でないとすれば、合理主義者が、独断的ではなければ、理性を信仰してもまったく矛盾しないし、しかも、決断〔決定〕と同様、真理の合理的 (批判的) な探求を、当分の間、続行しようとするにおいて、信仰 (faith) は必要だといえるかもしれないのだ。ポパーには、正当化主義の残滓があったので、残念なことに、ポパーは、理性信仰を「非合理的」信仰と呼んでしまったが、バートリーも、決断〔決定〕を非合理と呼んでそれを消去しようとしたのと同様に、信仰も非合理とみなして消去しようとしたのではないだろうか。

要するに、ポパーの「理性信仰」の信仰は非合理ではなく、また非合理的信仰主義 (fideism) でもない可能性があることを、ミラーの議論は示唆してくれている。この点だけでも、ミラーの批判 f. の議論は重要な貢献

をしていると思われる。

しかも、実はポパーは、バートリーとは対照的に、信仰 (faith) を積極的に評価しているふしもある。ひとつエピソードを紹介しよう。

ポパーは、ポパーの遠縁にあたり友人でも師でもあるユリウス・クラフト (1898-1960) の追悼文の最後を、次のように締め括っている⁵。

クラフトは、この〔合理性の〕伝統の生き残りのために人生のすべてをかけて働き、戦後〔第二次世界大戦後〕は、その伝統の再生と再確立のために働いた。かれは、知的責任、合理性、そして真理のための闘士として一生を捧げた。かれはけっして信仰を失わなかったし、けっして希望を捨てなかった (He never lost faith, and he never gave up hope)。

ポパーが、ここで信仰 (faith) を称賛の言葉として用いているのは明白である。おそらく、ポパーも、知的責任、合理性そして真理のために一生を捧げた、批判的合理主義の信仰者 (a man of faith)⁶ だったのではなかろうか (もちろん、信仰主義者ではない)。

⁵ Karl Popper, Julius Kraft 1898-1960 (1962), *After the Open Society: Selected Social and Political Writings*, eds. Jeremy Shearmur and Piers Norris Turner, Routledge, 2008, p. 24. 傍点引用者。クラフトは、哲学雑誌、*Ratio* を立ち上げた人物である。

⁶ 信仰主義者と信仰者の比較検討の考察については、拙稿、「ポパーの宗教観再考」、『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第 68 集、2013 年、103-118 ページ、を参照。

プラトンをかじる

山根正気（鹿児島大学）

「人間性に欠ける」とか「人間性のかけらもない」といったフレーズをよく耳にする。他人へのいたわりの態度がまったくなかったり、残虐な行為を平気で行なうことにたいして用いられる、非難めいた台詞である。「動物にも劣る」とも言われる。動物たちにとってはとんでもないぬれぎぬだが。しかし、「人間性」とは何なのかちょっと考えてみると、こうした台詞が人間がもっている性質の一部しか表していないことが分かる。真摯であったり、正直であったり、思いやりがあったり、利他的であったり、そのようないわば倫理的に「正しい」性質を「人間性」とよんでいるようなのである。

「人間性」をこのようにとらえることに特に異議はない。ただ、人間がそうあるべきだ（そうあった方がいい）という倫理的な期待を超えて、人間は本来そういうものだと思い込んでしまうと、そこには重大な問題が生じる。そのような思い込みをしている人にかぎって、自分は「反人間的な」性質とは無縁だと信じていることが多い。そして、「人間的な」性質の対極にある性質は抹殺されてしかるべきだ、ということになる。今日、さまざまな社会問題に対処するにあたっては、十分に警戒せねばならない主張が含まれているのだ。

最近、あることがきっかけとなって、岩波文庫に収録されているプラトンの著作を一通り読んだ。通勤電車の中で読んだのだから、あまり深い読みにはなっていない。ソクラテスやプラトンが「人間性」についてどう考えているのか興味があったのである。この二人によれば、人間の基本的な（あるいは卓越する）性質は、上記の意味での「人間性」ではない。人間は基本

的に利己的で、ほっておけばどんどん不正義の道へ落ちて行く、という理解が前提としてある。当時のギリシアにはこの基本的な性質を鷹揚にほめあげる風潮があった。プラトンは、そうした流れに逆らって人間が「正しく」生きるには、深い信仰にもとづく本人の特別の努力が必用だと考えた。最初にのべた意味での「人間性」は、実のところかなりの部分が神の領域に属する（大胆に言ってしまうと「非人間的」）ことがらであり、凡人の持ち合わせているものではない。世の中を見渡せば、そのような努力の人は稀である。国の指導者の墮落を暗に批判したソクラテスは、彼らを敵にまわさざるをえなかった。

ソクラテスやプラトンがある意味でリアリストであることに間違いはない。正義は通常の人間性をもってしては貫徹しないのである。しかし、これも一面的な考え方のように思われる。私たち進化学を学ぶ者は、人間のもっている性質をとりあえず、すべて「容認」する。存在するものを存在しないと強弁はしないということだ。そうすると、人間が持つ性質の全体を人間性とよぶことになり、これではほとんど意味のない言葉になってしまう。わざわざ人間性という言葉を作るのであれば、それはもう少し限定された意味をもつべきだろう。例えば、人間に特有の性質とか、人間に期待される性質とか。ここではそれを承知の上で、あえて人間がもつ性質を色眼鏡ぬきに見てみよう。

人間には、他人より優位に立ちたい、できるだけ多くのものを手に入れたい、できるだけ楽をしたい、といった基本的な欲求があり、これこそプラトンが言うところの、人間の基本的性格である。一部の動物とも共有する利己的な面と言っていいだろう。しかし同時に、他人と協力したい、他人に親切にしたい、世の中に奉仕したいという欲求もあり、これも同じように基本的な性質ではないだろうか。進化の研究者は、前者をより根源的と考えるが、後者の重要性も

強調する。数百万年も社会の中で生活してきた人類にとって、協調は必須な性質だからである。ただ、いわゆる「利他的」性質も究極的には利己性に還元可能であると考えている点で、通常理解とは少し異なっているが。

利己的な性質はただちに他者に実害をおよぼすとは限らないが、いつもその可能性をもっている。したがって、倫理という規範、つまり社会生活を円滑にすることを至上の目的とする価値観にあつては、利己的な行動は非難的になる。もちろん、社会生活の目標を利便性や生産性の向上とか、他のグループに対する軍事的優位の維持などに広げれば、そこでは利己的な性質が大いに「全体のために」貢献可能であろう。

しかし、円滑な社会生活という意味でも、利己的な行動が本当に無意味であるのかには、一考の余地がある。例えば、嘘をつくという行動を取り上げてみよう。一部の厳格な人をのぞき、「嘘も方便」を全面的に非難する人はいないだろう。ただしこの場合は、嘘がなんらかの意味で嘘をついた本人以外に益をもたらすことが前提だ。かなり意図的で意識された嘘である。これとは違ったもう少し日常的な嘘がある。一言も嘘をつかずに一週間すごすことが可能だと確信をもてる人がいるだろうか。私などは、到底不可能である。そのような嘘は、通常本人が色々な局面（些細なことが多いが）を乗り切るためにほとんど無意識に使われている（時にははっきりと意識しているが）。それによって、相手に対してそれほど被害は与えないが、本人は心の安心を維持できる。大多数の人がそうだとすると、これは利己的行為ではあるが、わずかな嘘によって人々が安心した日常を送れるとすれば、それは社会の安定にも貢献することになる。つまり、倫理的には好ましくないと考えられがちな嘘つき行為ではあるが、それにはれっきとした適応的意味があり、しかも社会に大きな損害を与えるとは限らない。（ここで「適応的」とは、

行為者の生存確率向上や子孫を残すことに貢献するということである。）

もちろん、他人や社会に実害をもたらす嘘もある。その一部はかなり意図的になされるものであり、嘘をついた当人は社会的懲罰を受けることもあるが、逃げ切って利益をうることもある。個人にとって嘘の適応的意義は微妙なバランスの上に成り立っているのだ。それでは、つましく時には社会の安定に貢献するような嘘と、他人や社会に損害を与える嘘との間に境界を引けるだろうか。境界は引けない、というのが私の結論である。つましい嘘は明らかに適応的意義があり、悪質な嘘も少なくとも個人に利益をもたらすことがある。したがって嘘をつくことは適応的であることがけっして少なくはなく、人間の重要な性質として進化してきた可能性がある。

盗みにも、同様なことが言える。盗みは社会的に非難される。しかし、どのような行為を盗みと看做すかの客観的な基準はない。今日では、著作権で保護されている芸術作品や著作を勝手に使って自分の作品をつくることは許されないが、過去にはそうした行為が平気でなされていた時代もある。著作権の侵犯はあるときを境に犯罪と見なされるようになったのだ。しかも、著作権の及ぶ範囲はおそらく時代とともに今後変わって行く。我々は法にふれない限りで、身の回りの資源を勝手に利用し、アイデアを模倣している。こうした利用や模倣の一部は十年後には犯罪と看做されるかもしれない。つまり人間は日常的に「盗み」を働いている。このような行為は明らかに適応的であり、また犯罪である窃盗との間には厳密な境界はない。しかも、窃盗は社会からの懲罰を受ける可能性があるが、いつも受けるとは限らず、適応という点では微妙なバランスの上に成立している。

人間がもっている反倫理的な性質や行為の大半は、適応的な起源をもっており、その多くは

現在でも行為者に利益をもたらさう。一方、利他性に代表される倫理的な性質や行為も、社会生活をしていく上で明らかに適応的な意味もっている。しかし、同時にそうした行為が行為者に不利益をもたらすことも多い。お人好しは、倫理的には賞賛されても、損をすることもある。つまり倫理的な行為も適応という観点からは微妙なバランスの上になりたっているのである。

もし、倫理的な性質のみが人間の基本的な（あるいは本来的な）性質であるならば、反倫理的な性質は何かの間違いで個別的に生じることになる。そうならば、その間違いを生じさせる契機を取り除くことにより、すべての人間を本来の姿にもどすことができる。困ったことに、このようなことを真剣に信じている人たちがいる。この事業は広い意味での教育によって達成されるはずだから、まず教育が重視される。教育者には自分の反倫理的側面に無自覚な人が多いから、ことは厄介になるのである。「いじめ根絶」を声だかに主張する人たちはこの範疇に入る。世の中には正義感からか、いじめ加害者の家族などに執拗ないやがらせをするやからもいる。自分の内なるいじめ願望がまったく自覚されていないのである。

そもそも、適応が基盤になっている人間の性質を根絶することは不可能である。嘘つきも盗みもいじめも、利己性の上になりたっているとはいえ、マイルドなバージョンでは個人の生存に大きく寄与しながら、社会におよぼすダメージは軽微であり、ときには社会の安定に寄与することすらある。そうした性質が反社会的になるかどうかは行為の規模や頻度にもよるが、時代や制度や価値観にも大きく左右される。あらゆる人が、条件次第で倫理的に好ましくない性質を表す可能性を持っている。だから「好ましくない」性質を本当に根絶しようとしたら、人類を最後の一人まで殺す以外に方法はない（最

後の一人は自殺するか、神が殺すしかないが）。存在するものを存在しないと強弁するならば、それ以外の結末はありえないからである。もちろん、実際にはそのように過激なことは起こらない。しかし「... 根絶」というスローガンのもとでなされる施策は、暴力、強制、監視、そして少なくとも混乱を伴う可能性が大きい。同様に、利他的な性質をあらゆる人に、あらゆる時に、ひろく浸透せしめることも、ほぼ絶望的である。利他性はつねに行為者に不利益をまねく可能性があるからである。根絶（撲滅）も浸透も、思想的には非常に危険なものであるということを経験せねばならない。

倫理の問題についてのプラトンの対処は面白い。彼は『国家』のなかで説く。人間はそもそも性悪だから全員を立派にするなどと考えないで、一部のエリートを正義の理念で教育し、厳格に教育された哲人を国の指導者にする。国家の指導者たちは家族の共有により、両親ともに自分の子どもを知ることができない、つまり自分の直系子孫を優遇するチャンスすら与えられないシステムに住まねばならない。国家の存亡を左右するハードな仕事にたいして見返りを求めてはいけぬ。報酬はかろうじて生活できるだけに押さえられる。女は全体的に男に劣るとはいえ、あらゆる仕事に従事する能力があるから、軍隊を含めて完全な男女共同参画が理想とされる。あらゆる点で無私が要求される。指導者に相応しくないものは容赦なく排除され、哲人になる素質があれば平民からもどんどん登用する。こうしたリーダーと軍隊に守られて、平民は国家に奉仕しつつ、凡人の姿で生活を送るのである。国家さえしっかりしていれば、平民が多少だらしなくても大事にはいたらないということか（もっとも、奴隷には平民の資格すらないが）。ここでは紹介するゆとりはないが、プラトンが考える哲人養成の教育プログラムは、人間の本質をえぐる、じつに示唆に富むもので

あることを付け加えておこう。

プラトンは、哲人政治は単なる夢ではなく、非常な困難は伴うが実現可能なプランであるという。しかし、利権を利用するチャンスに恵まれた政治家たちが、あらゆる不正義から無縁になれると考えるのは、あまりにもユートピア的である。絶大な権力を持つ軍隊の幹部たちが、すべて聖人であるという状況も想像しづらい。プラトンは賢明にも、倫理的に厳しい要求をごく一部のエリートにのみ課した。全ての国民の人間改造が不可能であることを知っていたからだ。ここが、彼が月並みなユートピア主義者と一線を画す点だろう。もちろん、彼の夢は一度も叶えられたことはない。どこか小さな共同体で、ある限られた時期に、彼の想定と似たような状態が存在したかもしれないが、それが世界の歴史に影響を与えるような規模に発展したということは寡聞にして知らない。

歴史上現れたユートピア主義の実践の数々は、性懲りなく無惨な破壊をくりかえしてきた。我々にとって大切なことは、いかなるユートピアも永久に実現しないということを、しっかり認識することである。人間が持っているいかなる性質も根絶しようなどと思わないことである。我々は、特定の時代に特定の制度のもと、ある幅の価値観をもって生活している。倫理や法律の役割は、何か絶対的なことを押し付けるのではなく、時々価値観をベースにして、行き過ぎを防ぐことにある。理想をもつことは結構なことで、我々から理想をとり除けば、思想はいっさいの活力を失うだろう。しかし、ユートピア的理想は理想としてとどめておくべきで、決して実現すべきものではないのだ。

正義などという言葉は、あまりにも胡散臭くて、絶滅危惧語の一つだろうくらいに思っていた。ハーバード大学で公共哲学を教えるマイケル・サンデルの著作のタイトルに書店の平積みで出会ったとき、今さら何が正義だと思って、

いつも素通りしていた。ある日、サンデル哲学を易しく解説した新書が現れて、手に取ってみた。結構面白いのである。サンデルの著作を読みあさるうちに、内容の面白さもさることながら、彼の態度にある種の共鳴を覚えた。自分の研究にオリジナリティなどないと率直に語っているのだ。確かに、哲学の分野で今になってオリジナリティなどでてきたら驚愕ものだが、哲学者はしばしば大したこともないことをさも新しそうに書くではないか。そして、彼は自分がプラトン主義者であることを表明する。これがきっかけで私もプラトンを読むことになったのである。

プラトンの論点は多岐に亘るが、基本的には正義論を正面にすえた形而上学である。ソクラテスがソフィストを批判する場面が何回も出てきて、これが正義論との関係で重要なテーマをなしている。ソフィストは政治家や軍人を志望する人たちに、採用されるための弁論術を売る人たちである。今流でいえば、プレゼンテーションやディベートの技術を伝授して金をかせぐ人たちであろうか。しかし、上で見たように、哲人はそんな生半可な知識や技術によっては生まれえない。比較が無理なことは承知だが、私には金をとって面接の技術を教える今の大学がダブって見えてくる。大学はソフィストに転落しつつあるのではないか。プレゼンテーションとかコミュニケーションだとかいえば、聞こえはいいが、たかが技術ではないか。それを教えるのが大学の使命なのか。そう、この「使命」こそがプラトン主義の核をなすもので、正義論とも密接な関係がある。大学もそうだが、あらゆる組織やプログラムは使命をもっている。使命に沿うのが正義である。これがプラトン主義だ。私にとっては、正義も使命もいやな言葉だが、こんな言葉を使わねばならないほど、今日の社会がソフィスト化しているということなのか。正義がここまで儂くなってしまったからな

のか。サンデルが白熱教室で学生に受けが良い背景には、そうした客観的な社会状況が存在し、

その状況が全体主義の元祖たるプラトンの亡霊を甦えらせたという解釈もありそうなのである。

＜＜第 24 回年次研究大会シンポジウムを終えて＞＞

仮説の反証を利用して新知識をうまく獲得することができるのはどのようなときか

——C. S. パースの理論に着目して——

村中 達矢

科学的な探究は次の三つの段階を踏んで行なわれる。第一段階は私たちの予想する習慣に割って入った事実 [1] を観察して、その事実を説明する仮説を形成する段階、第二段階はその仮説を前提として、実験結果などの経験的資料と照らし合わせることでできる内容の命題を演繹する段階、そして第三段階はその命題を経験的資料に照らし合わせて、その照合の結果を踏まえてその仮説を評価する段階である。第一段階と第三段階のどちらでも仮説の評価が行なわれるが、これらの段階は

明確に区別される。第三段階ではどの程度の経験的な裏づけがあるかという観点から仮説が評価され、第一段階ではどの仮説から先に検証にかけるべきかという観点から仮説が評価される。チャールズ・サンダーズ・パース (1839–1914) は複数の仮説の価値・規範を提示して、それらを第一段階の中の自己制御可能な認識過程で比較検討するべきだと主張した。なおここで仮説の価値とは仮説が備えていれば賞賛される性質のことであり、仮説の規範とは私たちが仮説を選ぶときに従うべき基準のことである。私たちが第一段階で仮説を評価するときには次のようなときもある、とパースは述べている。

ときおり、ある仮説が本当らしくないという事実、まさにそのこと自体がその仮説を暫定的に試しに受け入れることを勧める。(CP 6. 533)

そのような本当らしくない仮説を第一段階で受け入れたおかげでその段階のあとに続く探究過程がうまくいった例として、パースは次のような例を挙げている。

楔形文字を読解可能にしたいいくつものすばらしい推論の冒頭で、決して尤もらしいと思われなかった一つか二つの仮説が取り上げられまもなく反駁されたが、そのことには大きな

[1] パースはこういう種類の事実を指して「驚くべき事実」と呼んでいる (EP 2: 440–441)。以下ではパースのテキストを次のように表記する。

Peirce, C. S. (1931–60) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, eight volumes, edited by C. Hartshorne, P. Weiss, and A. Burks. Cambridge, MA: Harvard University Press. [CP n. m と略記。n は巻数、m はパラグラフ番号。]

Peirce, C. S. (1976) *The New Elements of Mathematics*, edited by Carolyn Eisele. Atlantic Heights, NJ: Humanities Press. [NEM n: m と略記。n は巻数、m はページ数。]

Peirce, C. S. (1998) *Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, vol. 2 (1893–1913), edited by the Peirce Edition Project. Bloomington, IN: Indiana University Press. [EP 2: n と略記。n はページ数。]

利益があった。(EP 2: 107–108)

私たちは通常正しいことが知りたいので、第一段階でも正しそうな仮説が評価され選ばれると思われがちであるが、場合によってはあえて間違っていそうな仮説が第一段階で選ばれるべきだというのである。

私たちがトランプでババ抜きをして遊ぶとき、誰が最後までババを手元に持つことになるかということはどういうようにして判るかという、それは、誰がそうなら「ない」かが一人ずつ明らかになることによってである。このように、ある考えが誤りであることが明らかになることは新知識を獲得することに利用できるということは、かねてからさまざまな思考法などに観察されてきた。例えば背理法、消去法、モードゥス・トレンスの形式 (A ならば B である / B ではない / したがって A ではない) の論証、ソクラテスの反対論証、ジョン・ステュアート・ミルの剰余法、数学で使われる補助線、「反面教師」という言葉、「人のふり見て我がふり直せ」という諺などにそうしたことが観察される。しかし、どんな内容の仮説を反証することによってもうまく新知識が得られるというわけではない。例えば、ある研究者が実験室で驚くべき現象を観察したときに、「この現象は惑星間の角距離と関係がある」や「その現象は皇太后がちょうど五時間前にしていたことと関係がある」といった無数に存在する可能ではあるが的外れな仮説を採用してそれらの仮説の反証を試みてもうまく新知識を得ることは期待できない。そのような外的仮説の大半は、パースによれば、仮説の自然さの考慮によって第一段階で排除されなければならない (EP 2: 108)。なお、ここで仮説が「自然である」というのは、たんに内容に無理がないという意味ではなく、「真理と似ている」という人間精神の本性

(nature) に適っているという意味である。

では、私たちはどのような性質を備えた仮説の反証に取り組めば新知識をうまく獲得することができるのであろうか。この点が押さえられれば、私たちは新知識を意図的かつ合理的に獲得することができるようになると期待される。本論文ではパースの仮説形成理論からこの点についてどのようなことが読み取れるのかについて検討したい。

仮説形成

先に見た探究の第一段階で行われる推論は仮説形成 (abduction) である。仮説形成のことをパースは次のように説明している。

仮説が最初に発生し、それを受け入れるということは、たんなる疑問としてにせよどんな度合いの確信をともなつてにせよ、推論的操作であり、私はこの操作を「仮説形成」と呼ぶことを提案する。この操作はある仮説を、同様に事実を説明する他の仮説よりも優先させることを含んでいる。それと同時にこの優先は仮説の真理にかかわるどんな先立つ知識にも基づいていないし、どの仮説のどの検証にも基づいていない。そうした知識や検証は仮説を試験的に受け入れた後のものである。私はこのような推論全てを特殊な名称を用いて「仮説形成」と呼んでいる。なぜかと言うと、この推論の妥当性は他の種類の推論の原理とは全く異なる原理に依拠しているからである。(CP 6. 525)

この仮説形成過程のうち自己制御できる過程を合理的に自己制御する方法は、仮説形成の

論理 (logic of abduction) と呼ばれている。以下に見るように、パースが提示した仮説形成の論理の内容を検討すると、その論理の中には、仮説を反証することによってうまく新知識を獲得することができるのは仮説形成過程でどのような性質を備えた仮説を採用したときだと考えられるのかについてのパースのいくつかの見解が含まれていることがわかる。

私たちが仮説形成を行なうときに研究の経済性を考慮すべきなのはなぜか

パースが提示した仮説形成の論理においては、「実験をして検証することのできる仮説であるということ」および「仮説が関連する全ての事実を説明すること」の二つに並んで、研究の経済性も考慮すべきだとされている。なおここで経済性というのは時間や資金の損失の少なさのことである (NEM 2: 37–38)。そのように研究の経済性を考慮すべき理由としてパースは「真なる仮説は無数の可能な間違った仮説のうちただ一つであること」ならびに「実験には資金・時間・エネルギー・思考の点で莫大な費用がかかること」を挙げている (EP 2: 107)。

またパースはなぜ研究の経済性が考慮されるべきなのかについておおよそ次のようにも説明している。仮説の検証には通常、多かれ少なかれ費用がかかる。たった一つの仮説を反証し棄却するために多くの有能な人の全生涯の労力が要求されることもまれではない。それと同時に、真偽について私たちが本当に何も知らない、あるいはほとんど知らない可能な仮説の数は非常に大きいことがある。物理学上の問題においては、そうした可能な仮説は、ときおり無限数存在する。経済性の問題は明らかに非常に重要な問題である。パースはおおよそ以上のように説明している (CP 6. 530)。

研究の経済性の考慮は、いくつかの点の考慮によって構成されている。研究の経済性の考慮を構成するそうした考慮の一つに仮説の検証にかかる費用の考慮がある。この考慮の内容を検討すると、仮説を反証することによって新知識をうまく獲得することができるのはどのような性質を持った仮説を仮説形成過程で採用したときかについてのパースの見解の一つをうかがうことができる。

仮説の検証にかかる費用の考慮

私たちが仮説形成を行なうときには、形成しようとしている仮説あるいは探究の第一段階で採用しようとしている仮説が検証するのに費用のかからないものかどうかを考慮すべきだとパースは述べている。この点について彼はおおよそ次のように説明している。もしある仮説がほとんど費用をかけずに実験をして検証することのできるものであれば、その仮説を先に検証にかけろべきである。なぜなら、たとえ他の理由でその仮説を許容できないとしても、その仮説を棄却することによって問題を明瞭にすることができるからである。パースはおおよそ以上のように説明している (EP 2: 107)。こうした考慮の例として彼は先に引用した楔形文字の研究の例を挙げている。この論述の前後で、彼はそのような仮説を検証した結果、その仮説が反証されない場合については何も述べていない。しかしそのような場合には、私たちは当面の間正しいとみなされる新知識を得ることができる。つまり、私たちは仮説形成を行なうときに「検証するのに費用のかからない仮説」をあらかじめ採用しておけば、その後その仮説が探究の第三段階で反証されようと反証されなかりょうと、どちらの場合にせよ何らかの利益を得ることができる」と期待される。

この仮説の検証にかかる費用の考慮につい

て、パースは次のようにも説明している。

所与の探究において、他の条件がかなり等しいのなら、あるいはたとえ全く等しくないとしても、間違っただけの場合にはそうであることが簡単に証明されうる仮説を選択せよ。もしその仮説が非常に容易にかたづけられることのできるものなら、すぐにそれを採用して終わりにせよ。しかし、その仮説を採用している間は、それを最大限公正に評価するようにするために、誠実に採用せよ。

(NEM 4: 63-64)

このような仮説を仮説形成過程で採用し、その後探究の第三段階でその仮説を反証することによって得られる利益として、パースは問題を明瞭にすることができることを挙げている、ということを見たとした。この利益は、つまりは、夾雑物としての間違っただけの内容の仮説に今後煩わされなくなることであり得る。

この考慮をする際に参照されるべきものとしてパースがより詳しく説明している仮説の価値・規範を整理すると次の五つにまとめられる (CP 6. 532, 6. 533)。

- 1) 仮説からその帰結が迅速に演繹されるという性質 (帰結を演繹するときの時間の損失が少ない)
- 2) 仮説の帰結と観察結果が迅速に比較されるという性質 (その比較をするときの時間の損失が少ない)
- 3) 仮説が間違っていそうな場合に、その仮説の検証が私たちに長い間手間取らせることはないということが何らかの理由で約束されているという性質 (検証するときの時間の損失が少ない)

- 4) 仮説が間違っている場合には、他の仮説よりも少ない費用で排除されうるという性質 (反証にかかる費用が少ない)
- 5) 仮説が間違っていそうな場合に、私たちが偶然、その仮説を検証するための手段をよく与えられているという性質 (検証の手段を得るのに今後かかる費用が少ない)

1) の仮説から帰結が演繹される過程の性質を「仮説の検証に費用がかからないこと」に含めていることに見られるように、パースは探究の第三段階だけではなく、第二段階と第三段階を合わせて「仮説の検証」と呼んでいるようである。5) 以外の四つはみな、これまでと今後にかかわりなく何かの損失が少ないという性質であるのに対して、5) だけは今後ある損失が少ないという性質である。つまり、5) の性質を持つ仮説を選ぶときには、その仮説の検証に要する費用がこれまでにすでにいくらかかかってきたという場合がある。この点で5) は他の四つと異なる。

以上より、仮説の反証を利用してうまく新知識を得ることのできる時の一つは、探究の第一段階つまり仮説形成過程で「検証するのに費用のかからない仮説」を予め選んでおいて、その後第三段階でその仮説が実際に反証され、それに伴って知識が得られるときだと考えられる。

仮説の検証にかかる費用の考慮と並ぶ研究の経済性の考慮の一つに仮説間の関係の考慮がある。この考慮についてパースは次のように述べている。

提案されたものと他の案の関係から生じる [経済性の要因] は、仮説形成において特に重要である。なぜなら、所与の仮説は完全に申し分なく証明されるだろうと私たちが確かに期待

することができるのは非常にまれなことであり、したがって、提案された仮説がダメになったときに何が起こるかを私たちは常に考慮しなければならないからである。(EP 2: 109)

このような仮説間の関係についての考慮は「注意深さ」の考慮、仮説の適用範囲の広さの考慮、そして仮説が錯綜していないことについての考慮の三つの考慮から成る。

注意深さの考慮

注意深さの考慮についてのパースによる説明を読むと、この考慮は、念頭に一つの仮説があるときに、その仮説の主語を固定した上で述語を表現し直す方法を示したものだということが分かる。パースによると、ここで言う注意深さとは「仮説をその最小の論理的要素に分解すること」ならびに「一度にそれらの要素のうち一つだけを検討すること」の二つへの注意深さのことである。そしてここで言う「仮説の最小の論理的要素」とは何かといえば、パースによる注意深さについての説明から考えると、「仮説の主語となる事物にかんして、イエスと答えられる確からしさとノーと答えられるそれがほぼ等しいと私たちが思うように立てられた、イエスカノーで返答可能な問い」と「イエスとノーの答え」から作られる肯定文と否定文の仮説のことだと解釈される。つまり、注意深さの考慮をするとは何をするということかという、仮説形成過程で念頭に一つの仮説があるときに、

- 1) その主語にあたる事物にかんして、一つにイエスカノーで返答可能であり、二つにイエスと答えられる確からしさとノーと答えられるそれがほぼ等しいと私たちに思われるという、そういう二つの性質を兼ね備え

た問いをまず立てる。

- 2) 次に、その問いと「イエスとノーの答え」から肯定文と否定文の仮説を作る。以上のようにして述語だけが言い直された仮説のことを仮説の最小の論理的要素と呼ぶ。
- 3) そして、仮説形成過程において元の仮説ではなくその要素の方を採用して、先に検証にかけることにする。
- 4) なおかつ、その際にはその要素を同時に二つ取り上げるようなことはせず、必ず一つずつ取り上げるようにする。

以上のようにすることを注意深さの考慮というのだと考えられる (EP 2: 109–110)。この考慮においては最小の論理的要素に分解されているという性質、ならびに他の仮説と同時に検証にかけられることはなくその仮説だけが検証にかけられるという性質が仮説の価値・規範とみなされている。この考慮は、「イエスカノーで返答可能な問い」と「イエスとノーの答え」から作られる対立仮説の数は二つであるのに対して実際に起こる事実の一つであるということを利用して知識を得ようとしている。ところで、デカルトの四つの規則のうち分析の規則と総合の規則は次のようなものだった (デカルト 1973、三宅・小池訳、26 頁)。

分析の規則：自分が吟味する困難な問題の各々をできるかぎり多くの、しかもそれを最もよく解くために要求されるだけの数の小部分に分割すること。

総合の規則：自分の思考を順序にしたがって導くこと。最も単純で最も認識しやすい対象から始めて、すこしずつ、いわば段階を踏んで、最も複雑なものの認識にまでのぼってゆき、しかも自然なままでは相互に前後の順序をもたない対象のあいだにさえも順序を想定して進むこと。

パースは注意深さの考慮においてデカルトのこれらの規則の基本的な考え方を踏襲しているようである。

パースによると、この注意深さにかんして、二十の問いのゲームが教訓的であるという。二十の問いのゲームとは、まずゲームの参加者が二手に分かれ、一方の当事者が世間で知られている個別的对象を一つ思い浮かべる。それに対してもう一方の当事者はイエスカノーで答えられる二十個の問いを出して、それら全てに対するイエスカノーの答えを相手から得て、それらの答えをもとにして相手が何を思い浮かべているのかを推測して当てるというゲームである。世間で知られている個別的对象の数は 2^{20} 個（およそ105万個）よりも少ないので、質問者はうまく問いを立て続けられれば、求める対象を言い当てることができる。つまり、質問者は残る対象候補のおよそ半数が共有する性質を挙げて、「求める対象は何々という性質を持つか」と問い続けられれば、問いへの答えを得るたびに対象候補の数は半減してゆき、二十個目の問いへの答えを得た段階で対象を一つに絞り込むことができる（EP 2: 109）。この二十の問いのゲームでは「求める対象は何々である」というのが仮説にあたり、「求める対象は何々という性質を持つ（持たない）」というのが仮説の最小の論理的要素にあたると考えられる。

もし過去の光学の研究に注意深さの考慮が適用されていれば、光学の発展は五十年は早められただろう、というようなことをパースは言っている。彼によれば、もし光学の研究に注意深さの考慮が適用されていれば、光学研究は次のような経緯をたどったと考えられる。「光線は何で構成されているか」が問われたとき、注意深さの考慮が適用されていればこの問いはイエスカノーで返答可能ではない

ので後回しにされ、「光線は進行方向に均質か」が先に問われることとなった。そうすると回折が実際よりも早く知られ、進行方向に均質ではない光線もあるということが知られた。このときさらに注意深さの考慮が適用されていれば、次に「光線は進行方向と垂直なあらゆる方向に均質か」が問われることとなった。この問題が問われて実験にかけられていれば偏光が直ちに発見され、進行方向と垂直などの方向をとっても均質というわけではない光線もあるということが知られた。実際には光学研究はこのような経緯をたどらなかったけれども、もし注意深さの考慮が適用されていればこうなっただろう、とパースは述べている（EP 2: 109–110）。この光学の例においては「光線は何々で構成されている」というのが仮説にあたり、「光線は進行方向に均質である（均質ではない）」、「光線は進行方向と垂直なあらゆる方向に均質である（均質ではない）」というのがその仮説の最小の論理的要素にあたると考えられる。

注意深さの考慮は研究の経済性の考慮の一つとされている。パースによる注意深さの考慮についての説明から考えると、この考慮をすることによって研究の経済性が高められるというのは、一つに多くの無駄な論争や混乱した実験が節約されるということであり、二つに、仮説の最小の論理的要素を検証した結果獲得される新たな知識を得るまでにかかる時間が短いということだと考えられる。

ここまで見てきた注意深さの考慮の内容から考えると、仮説の反証を利用して新知識をうまく獲得することのできるきがさらにもう一つあると考えられる。それはどういふときかというと、探究の第一段階つまり仮説形成過程で二つある仮説の最小の論理的要素のうち間違った内容の方が採用され、その後、第三段階でその要素が反証されて、それに伴

って新知識が得られるときである。その際得られる知識は第一段階で採用されなかった方の論理的要素が正しいという内容の知識である。しかし、注意深さの考慮をすることによって得られるのはそうした知識だけではなく、この考慮は、光学の例における回折や偏光のように、新たな現象の発見を伴うこともあるようである。

許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことができる考慮

仮説形成過程のうち自己制御可能な過程で行なうべき考慮として、パースは注意深さの考慮と似た内容のもう一つの考慮を（「注意深さ」が解説されているのは別の論文で）唱えている。この考慮には特に名前はつけられていないけれども、内容から言ってこの考慮は許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことができる考慮である。注意深さの考慮は念頭に一つの仮説があるときに行なうべき考慮であるのに対して、この考慮は念頭に複数の仮説があるときに行なうべき考慮である、という点でこれらの考慮は異なる。考えてみれば、注意深さの考慮も許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことのできる考慮なので、後者の考慮はより正確に「念頭に複数の仮説があるときに許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことのできる考慮」と呼んだ方がよいのかもしれない。

どう呼ぶかはともかくとして、後者の考慮についてのパースによる説明をある程度分かり易く言い換えると、以下ようになる。一群の現象を説明する個別の可能なやり方が三十二通りあると仮定しよう。そうすると、三十一個の仮説が排除されなければならない。このとき最も経済的な手順は、容易に引き起こされる状況下で生じる事実であり、なおかつそれらの仮説のうち十六個からは帰結とし

て導かれるが、残りの十六個のどの仮説からも帰結として導かれない事実、そのような何らかの観察可能な事実を、探し出すことができる場合には探し出すことである。このような実験は、もし考え出すことができれば、仮説の数を一度に半減させる。あるいは、三十二個の仮説は八つずつの四つの組に分かれており、ある実験の結果にかんする四つの予測と仮説の各組は一対一に対応しており、そしてどの組に属するどの仮説にとっても、対応する実験結果の予測はその仮説が真であることの必然的帰結であるとしよう。このとき、もし実験がそれらの予測のうちどれか一つを生じるなら、たった一回の実験が許容可能な仮説の数を四分の一にする。このような実験、ないしは何かこれに近いような実験が可能な場合には、他のどのような進路をとることも賢明でないのは明らかである。しかし残念なことに、仮説が一つにしばらく込まれる前にこの方法が使いつくされてしまい、その結果、残りの仮説は一つずつ検証する以外にないということになるのが普通である。おおよそ以上のようにパースは説明している (CP 6. 529)。

つまり、この考慮は何をすることなのかというと、仮説形成過程で念頭に複数の仮説があるときに、

- 1) 一つに、念頭にある仮説のうち半数あるいは四分の一といった目立つ割合の仮説全てがもし正しければ起こるはずであり、二つに、残りのどの仮説が正しくても起こらないはずであり、三つに容易に引き起こすことができ、そして四つに観察可能であるという、こういう四つの性質を兼ね備えた「起こるかもしれないこと」を、考え出すことができる場合に考え出す。
- 2) それが実際に起こるのかどうか、実験をし

て確かめる。

- 3) 実験結果を踏まえて間違いであることが判った仮説を排除する。

以上のようにすることが「複数の仮説が念頭にあるときに許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことのできる考慮」なのだと考えられる。

ここではこのような考慮をした結果、排除されたりされなかったりするという性質が仮説の価値・規範とみなされている。この考慮も研究の経済性の考慮の一つとされている。この考慮が研究の経済性の考慮であるのはどのような点においてかという点、一つに実験に費用がかからないという点、二つに許容可能な仮説の数を減らすのに費用がかからないという点においてだと考えられる。

この考慮もまた、新知識を得るために仮説の反証を利用している。しかし通常、この考慮によっては正しい一つの仮説を言い当てることまではできず、この考慮によってできることは、ある程度まで許容可能な仮説の数をしばり込むことまでのようである。一度の実験によって許容可能な仮説の数が大幅に減らされるような探究の局面を意図的に作り出そうとする点で、注意深さの考慮とこの考慮は同じである。しかし、そうした局面を作り出すために、注意深さの考慮は念頭に一つの仮説があるときにその仮説の述語を表現し直して二つの仮説を作るのに対して、この考慮は念頭に複数の仮説があるときに一定の性質を持った「起こるかもしれないこと」を考え出そうとする、という点でこれらの考慮は異なる。

仮説の適用範囲の広さの考慮

注意深さの考慮と並ぶ仮説間の関係についての考慮の一つに仮説の適用範囲の広さの考

慮がある。ここで言う仮説の適用範囲の広さとは、仮説が説明することのできる現象の多さのことである。この広さの考慮は、次の二つの考慮を含む。

- 1) ある仮説が説明する現象と同様の現象が他の主題で観察されたら、その同様の現象もその仮説によって説明されるかどうか、つまりその仮説の適用範囲が広いかどうかを調べること
- 2) 適用範囲が広いことが分かっている仮説のその広さを確かめるために、その仮説が説明する現象と同様の現象を多数調べること

パースは、仮説が現象を説明するかどうかを調べることに費用がかかりすぎないということ、この広さを考慮することの条件としている (EP 2: 110, 114)。ニュートンの四つの規則のうち規則 I と II は次のようなものだった (ニュートン 1977、中野訳、481 頁)。

規則 I: 自然の事物の原因としては、それらの現象を真にかつ十分に説明するものより多くのものを認めるべきではない。

規則 II: したがって、同様の自然の結果に対しては、できるだけ同じ原因をあてがわなければならない。

パースはこの広さの考慮で、ニュートンのこれらの規則の基本的な考え方を踏襲していると考えられる。パースはこの考慮の応用例について、おおよそ次のように説明している。気体分子運動論は、そもそもただボイルの法則を説明する目的で提案されたものだが、その後この理論はいくつもの非保存現象も説明することができるということが分かった。こういうときには、私たちは、非保存現象を広く調べれば、ある場合には、その理論があら

ゆる非保存現象を説明することを確認し、その結果、非保存現象を生じる唯一の原因を知ることになるだろうし、そうでない場合には、私たちはその理論では説明のつかない非保存現象があることを知り、そこからさらに研究を進めた結果、非保存現象を区別する基準を知ることとなる。パースはおおよそ以上のように説明している (EP 2: 110)。

この適用範囲の広さの考慮も研究の経済性の考慮の一つとされている。彼による説明から考えると、この適用範囲の広さの考慮が研究の経済性の考慮の一つであるとは、次のような意味である。私たちが適用範囲の広い仮説が説明するのと同様の現象を多数調べれば、その結果より適用範囲の広い知識を得る場合と、その結果その仮説では説明できない現象に直面する場合がある。前者の場合、その新知識によって私たちは研究における繰り返しの多い作業を少なくすることができる。後者の場合であっても、私たちはその現象をさらに調べることによって新知識を得ることができる。この適用範囲の広さの考慮が研究の経済性の考慮の一つであるとは、こういう意味だと考えられる (EP 2: 110)。つまりパースはここでは損失の少なさだけではなく利益の多さも含めて「経済性」という用語を使っているようである。

以上より、適用範囲の広い仮説で説明できそうな、その仮説で説明できる現象と同様の現象を多数調べた結果、その仮説では説明のつかない現象があることを知り、その現象をさらに調べた結果、その現象についての新たな知識を得るといえるとき、このときもまた、仮説の反証を利用して新知識をうまく獲得することができる時の一つだと考えられる。

仮説が錯綜していないことについての考慮

注意深さの考慮および仮説の適用範囲の広

さの考慮と並ぶ仮説間の関係についての考慮に仮説が錯綜していないことについての考慮がある。ここで仮説が錯綜していない (incomplex) というのは、仮説と経験的データの間の誤差を解明するのが簡単であるという意味である。この考慮について、パースはおおよそ次のように説明している。仮説が錯綜していないとは、仮説が、ビリヤードをする人が言うようによい^{あとだま}跡球をもたらすことができるということである。たとえある仮説が事実と適合しないとしても、依然としてその仮説と事実の比較は次の仮説にとって有益でありうる。たとえ私たちがある仮説を複雑にすることによってそれを真理に近づけることができると思ったとしても、私たちは非常に簡素な仮説を暫定的に仮定した方がよい。例えば、ある観察可能な量 y は $y=a+bx^2$ の数式で表現可能な、実験の条件によって決定される量 x の関数だろう、と私が思ったとしても、私はこれに確信がないので、その前に $y=cx$ がどれだけ実験結果と適合するかを調べた方がよい。なぜなら後者の方がより容易に誤差を解明できるからである (EP 2: 110)。この考慮についてパースは次のようにも説明している。

たとえば、 $y=a+bx+cx^2+dx^3+\dots$ と仮定して係数を確定したりせずに、 y が定数項を含むかどうか、次に y が x とともに無限大へと向かうかどうか、次に y の増分は x などの増分におおよそ比例するかどうかを問え。(NEM 4: 64)

惑星の軌道が楕円形であることをケプラーが発見する前に、コペルニクスがそれを円形だとしたことは、後から考えてみればパースの言う錯綜していない仮説が採用された例に

あたると考えられる。ここで円軌道仮説の方が楕円軌道仮説よりも錯綜していないというのも、たんに円の方が楕円よりも簡素であるという意味ではなく、円軌道仮説の方が楕円軌道仮説よりも観測結果との間の誤差を説明するのが簡単であるという意味である。

この考慮も研究の経済性の考慮の一つとされているが、ここでこの考慮をすることによる研究の経済性が高いというのは、仮説と経験的データの間の誤差を説明することによる時間や資金の損失が少ないということである。

以上より、探究の第一段階つまり仮説形成過程で錯綜していない仮説が採用されて、その後第三段階でその仮説と経験的データの間の誤差が簡単に説明されるというとき、このときも、仮説の反証を利用して新知識をうまく獲得することができるかという一つの点と考える。

以上に見てきた考慮点以外にも、パスは私たちが仮説形成を行なうときに考慮すべきこととして、仮説の自然さ、客観的確率、主観的尤もらしさなども挙げている。その上で、私たちは仮説形成を行なうときにはそれらの考慮点を比較検討しなければならないとしている (EP 2: 110)。

私たちが探究の第一段階つまり仮説形成過程で予め特定の性質を備えた仮説を採用しておくことによって、その後第三段階で仮説が反証されるのにもなって新知識をうまく獲得することができるのは典型的にはどのようなときであると考えられるかについて、ここで改めて列挙すると次のようになる。

- 1) 探究の第一段階で検証するのに費用がかからない仮説を予め選んでおいて、その後第三段階でその仮説が反証され、それに伴って知識が得られるとき
- 2) 探究の第一段階で先に見た「注意深さ」が

考慮されて、間違った内容の「仮説の最小の論理的要素」が採用され、その後第三段階でその要素が反証されて、それに伴って知識が得られるとき

- 3) 探究の第一段階で先に見た「複数の仮説が念頭にあるときに許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことのできる考慮」が行なわれ、その後第三段階で実際に多くの仮説が排除され、それに伴って新知識が得られるとき
- 4) 探究の第一段階で予め適用範囲の広い仮説を採用しておいて、その後第三段階でその仮説で説明できそうな、その仮説で説明できる現象と同様の現象を多数調べた結果、その仮説では説明のつかない現象があることを知り、その現象をさらに調べた結果、その現象についての新たな知識を得るとき
- 5) 探究の第一段階で先に見た「錯綜していない」仮説を予め採用しておいて、その後第三段階でその仮説と経験的データの間の誤差が簡単に説明されるとき

探究の第一段階で正しそうな仮説ではなくてあえて間違っていそうな仮説を採用して、その後第三段階で実際にその仮説を反証してそれに付随する形で何らかの知識を得ようとするときには、私たちは第一段階で以上の五点をよく考慮し比較検討することによってうまく知識を得ることができると期待される。

付記

仮説と知識はどういう関係にあるのかについては、おおよそ次のように整理すればよいと思われる。まず、観察された事実になんかが言い加えられた内容を持つ命題や仮定を仮説と呼ぶ (CP 6. 524, 6. 525)。次に、ある程度の検証をくぐり抜けた仮説、ないしはある程度経験的に裏づけられた仮説のことを知識と呼

ぶ。熱があり、咳が出て鼻水も出るので「風邪をひいたかな?」と思い、病院に行って医者に見てもらったら「風邪ですね」と言われた場合について考えてみよう。この場合、「熱がある」、「咳が出る」といったたんに症状を表わした文は仮説とは言わないが、「風邪をひいたかな?」という文（言い換えれば「これらの症状が出ているのは風邪をひいたからではないか?」という文）は、観察された症状を表わした文に「風邪」という言葉が言い加えられているので仮説である。しかし、このような疑問文で表わされた推測のことを知識とは言わないことについては大方の同意が得られると思われる。そして医者から「風邪ですね」と言われた後に知る「自分は今、風邪をひいている」ということは知識である。この知識は、医者に見てもらったということ、あるいは医者の頭の中にある医学的な知識によって裏づけられている。

先に見た「念頭に複数の仮説があるときに許容可能な仮説の数を手早く大幅に減らすことのできる考慮」はたんに仮説形成過程だけで行なわれる考慮ではなく、仮説検証過程で行なうべきことについても言ったものではないのかという疑問には、どのように答えればよいのであろうか。たしかに、私が箇条書きにしてこの考慮を説明した箇所を読み返してみると、起こるかもしれないことが実際に起こるのかどうかを実験をして確かめるとか、その結果を踏まえて間違いであることが判った仮説を排除するとかといったように、探究の第三段階で行なうべきことが書かれている。したがって、この考慮は仮説形成の論理の一部であるだけでなく、第三段階も含めた探究の論理でもあるということを認めなければならない。ただ、この考慮の主要部分、つまり一定の性質を備えた「起こるかもしれないこと」を考え出そうとすることは、あくまで

仮説形成過程の中の自己制御可能な過程で行なわれるのだということは強調しておきたい[2]。

参考文献

- Peirce, C. S. (1931–60) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, eight volumes, edited by C. Hartshorne, P. Weiss, and A. Burks. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Peirce, C. S. (1976) *The New Elements of Mathematics*, edited by Carolyn Eisele. Atlantic Heights, NJ: Humanities Press.
- Peirce, C. S. (1998) *Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, vol. 2 (1893–1913), edited by the Peirce Edition Project. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- デカルト (1973) 『方法序説』 デカルト著作集 第1巻、三宅・小池訳、白水社
- ニュートン, I. (1977) 『プリンシピア』 中野猿人訳、講談社

[2] この論文は日本ポパー哲学研究会第24回年次研究大会での発表原稿に加筆訂正をしたものです。発表当日にコメントをくださった皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

対話によるポパー入門 (6)

蔭山泰之

登場人物

雄太：大学を卒業して某電機メーカーに勤務する会社員。慶介の大学時代からの親友。

慶介：某大学大学院生。カール・ポパーを中心に科学哲学を研究している。雄太の大学時代からの相談相手。

第6回 形而上学への冒険

円熟したポパー

慶介「一九六〇年代に入ってからポパーは、これまで話をしてきたような論争もはなばなしく展開してきたし、手術した眼の状態もよくなって、論文もいっぱい書いて、講演もいっぱいやって、大活躍するようになってきた」

雄太「それで、オレなんかもポパーの名前を聞きかじるようになれたんだな」

慶介「うん、このころいろいろな分野に影響を及ぼすようになったからね。それで、一九六三年に、それまでの論文や講演をまとめて『推測と反駁』っていう本を出版したんだ」

雄太「推測と反駁か……。大胆に理論を推測して、それをきびしく反駁しようっていうポパーの方法をまさにいい表したタイトルだね」

慶介「さっき話をしたマルクス主義、アドラー、アインシュタインについての決定的な体験談は、この本の第一章に詳しく書いてあるんだ」

雄太「へえ、あとで読んでみよっと……」

慶介「ポパーは、一九六九年にLSEを退官しているんだけど、その後もますます意気盛んで、つぎつぎに論文を発表したり、講演したり

してる」

雄太「相変わらず、バイタリティは衰えないんだね」

慶介「このころのポパーの活躍を象徴する出来事としては、現代哲学者叢書の一冊にポパーが選ばれたってことがあげられるだろうね」

雄太「なんだい、その叢書って？」

慶介「これは、著名な哲学者が生きてるあいだに質問したり、批判したりすることをタブー視するっていう奇妙な慣習を打破しようとして、シルプっていう人が企画した叢書なんだ。最初にその哲学者の自伝があって、つぎにその人の思想に対する多数の批判的な寄稿論文が載せられていて、最後にそれらに対するその哲学者からの反論や答えが載せられているっていうスタイルの叢書なんだ」

雄太「へえー、けっこう画期的な企画だね」

慶介「そうだよ。それで、ただでさえこの叢書は分厚くなるのに、一九七四年に出版されたポパーの巻の場合、上下二巻になって、ゆうに一〇〇〇ページを超えている」

雄太「へえー、論争好きなポパーらしいよな……」

知識の進化論

慶介「ところで、シルプの叢書が出版される二年まえの一九七二年に、ポパーは『客観的知識』っていう二冊目の論文集を出版しているんだ。ところが、この論文集はまえの『推測と反駁』とはだいぶ毛色が違ってたんだよ」

雄太「っていうと、どういうふうに？」

慶介「この論文集には一九六〇年代後半から

の論文も収められているんだけど、その論文でポパーは独自の三世界論っていう新しい理論を展開している。これが、それまでのポパーの理論とだいぶ毛色が違うんだ」

雄太「三世界論ねえ……。なんだいそれ？ それがさっきいったポパーの形而上学かい？ 名前だけ聞いてもぜんぜん想像つかないな……」

慶介「そうだろうね。でも、ポパーの三世界論について話をするまえに、ちょっと進化論的認識論について触れておいた方がいいかもしれないな……」

雄太「進化論って、あのダーウィンの？」

慶介「そうだよ。環境に適応できない種が自然選択で淘汰されて、適者が生存して生物は進化していくっていうあれだよ」

雄太「それが認識論とどういう関係があるんだよ？」

慶介「まえに、ポパーが『自分たちのかわりに理論を死なせることができる』っていったという話をしたよね。進化論の研究対象は生物だけど、この生物を理論で置き換えてみたらどうなるかな？」

雄太「……そうすると、死んだ理論ってのは淘汰された生物ってわけか。すると理論が考え出されるってことは、なにか突然変異みたいなもんなんだな」

慶介「そう、それで自然選択が反証の試みとしてのテストってわけさ。テストにパスしなかった理論は淘汰されていく……。もちろん、さっきもいったみたいに、ポパーは理論の修正もまえのかたちの理論の放棄って考えてるから、淘汰を通じて理論は変化していくってな感じかな。こうした見方から、アメリカのキャンベルっていう人がポパーの認識論を進化論的認識論って呼んだんだよ」

雄太「なるほどね、理論の発展を生物進化になぞらえることができるってわけか……」

慶介「ポパーは初期のころは、科学といってもおもに物理科学に関心があって、生物学のなかでもダーウィンの進化論なんかは、傾向とか趨勢なんかを記述しているだけだなんて考えていたらしい。でも、一九六〇年代くらいからは、生物学の方にも関心を示すようになってきて、こういう進化論的なアプローチを積極的にとるようになってきたんだ」

雄太「でもだよ、これはあくまでもたとえにしかすぎないんじゃないの？ たしかにポパー的な理論発展のとらえ方と生物進化はよく似てるけど、たんに似てるってだけじゃそれまでじゃないのか？」

慶介「まあ、そういつてしまうと実もふたもないけどね。たしかに似てるってだけだったら、それでおしまいだ。けれどね、ポパーはさらに理論の発展ってことを生物進化の延長としても考えているんだよ」

生物はみんな期待してる

雄太「それって、どういうことなんだ？」

慶介「ポパーにいわせれば、知識の進歩ってことは、それまでの知識を修正して改善することなんだ。とすると、そのまえの知識ってものをどんどんさかのぼっていくことができるよね。そうすると、生得的知識、つまり生まれつきもっている知識にいきつくはずだっていうことになる……」

雄太「それって本能みたいなもんかな？」

慶介「うーん、そうともいえるけど、ちょっと違うな。もっともポパーはむかしの哲学者みたいに、人間には神から与えられた絶対に誤ることのない生得観念があるなんてことは認めないんだけどね」

雄太「いまでも、そういう神から与えられた知識をもってるぞ、なんていうやついるけどね」

慶介「ポパーがいう生得的知識ってのは、いわば推測とか期待なんだ」

雄太「期待って、『君に期待しているよ』って
いうあの期待？」

慶介「まあ、それも期待だけだね。本能もそう
だけど、生物は環境からの刺激に対して反応
したり、反作用したりするよね。その反応が複
雑になると、まるでなにか起きるまえにそれが
起きることを予想しているような反応にもなる。
たとえば、植物はだいたい季節の変化を予測し
てるっていいよね。渡り鳥なんかもそう
だよ」

雄太「そうだよな、なんでこんなこと知って
るの、なんてびっくりさせる虫とか下等動物と
かいっぱいいるよね……」

慶介「でもこの期待は間違えることもあるし、
間違えたために死滅しちゃう場合もある。だか
ら、こうした期待は保証されたもんなんかじゃ
ぜんぜんないんだよ」

雄太「恐竜は環境に期待しすぎちゃったって
わけか……」

アメーバからアインシュタインまで

慶介「そうかもしれないね。ところでよく考
えてみると、期待っていうものは、つぎになに
がくるかを予想してるんだから、『そうになったら、
こうなるはずだ』とか『こうすれば、こうなる
に違いない』とかの法則性を前提にしているよ
ね」

雄太「なるほど、そうだな……」

慶介「ポパーが、サーチライトみたいになに
かを照らし出さなければ観察なんかありえない
っていうのもこういうわけだからだよ。そうい
う規則性に着目するんじゃないきゃ、観察なんて
ものはありえないってね」

雄太「観察ってそういうことだったのか……」

慶介「それで、そういう規則性のうち、『そう
になったら』とか『こうすれば』っていう部分は、
生物の器官によって認識される部分だよ。眼
とか耳とかの器官によってね。だから、環境に

ついでの期待と生物の器官は密接に結びついて
るんだよ」

雄太「たとえばどういうことなんだ？」

慶介「そうだな、たとえば遠くの外敵をいち
はやく見つけたものは、そうじゃないものに比
べて生き残りやすいよね。だから、そういう場
合、眼のはたらきの悪い種は淘汰されて、眼の
はたらきのいい種がより環境に適して進化する。
っていうよりも、眼なんていう高度に複雑な器
官は、環境適応の結果だっていいと思
うよ」

雄太「ふんふん。それで……」

慶介「それで、さっき期待が法則性を前提に
してるっていったけど、これが高度に発達した
ら、それはもう立派な知識だっていいん
じゃないかな。それで期待を通してつぎにどう
なるかを予想するための道具として器官がある
とすれば、知識を高度に発達させた理論なんて
のは、器官だっていいかもしれない。
ただし、ふつうの器官と違って身体の外にある
器官だけだね」

雄太「カメラが眼の延長だとか、クルマが脚
の延長だっていうのと似てるよな」

慶介「うん、そうだね。要するに、知識は身
体外の器官のひとつであって、生き物が生きて
いく上でのさまざまな困難や問題を解決するた
めにあるって見ることもできるんだ。そしてこ
う見ると、生物の進化と理論的知識の発展、進
歩がスムーズにつながってくるよね」

雄太「なるほどね、理論の発展が生物進化の
延長だっていうのはそういうわけだったのか」

慶介「そう、そしてこのなにかを期待して、
それをテストして、間違ったらなおして、環境
に適応したりして問題を解決しながら生き延び
ていくっていうプロセスは、地球に最初に誕生
したアメーバから、人類最高の頭脳っていえる
アインシュタインまでおんなじだってポパーは
いうんだよ」

雄太「へえー、なかなか大胆な発言だね。アメーバとアインシュタインをいっしょにしちゃうんだから。オレたちなんかそのあいだのどこらへんにいるのかな？」

慶介「あんがいアメーバに近かったりしてね……」

雄太「うへっ、やっぱり……」

三つの世界

慶介「ところでポパーは、自然の世界をいま話したような仕方で見てるんだ。宇宙がはじまってから、最初に物質ができた。そしてだいぶ時間がたって地球が誕生し、そこに生命が誕生した。そして生命はどんどん進化して、進化の過程で意識ってものが現われた。そして、意識をもった生物のうちでもっとも進化した人間は、さっきいったみたいにいろいろと問題を解決していくうえで、自分の知識をことばに表わして、だれがみてもわかるようなかたちの知識をつくり出していったんだ」

雄太「なかなか壮大なスケールの話だな」

慶介「そこで、ポパーは最初にできた物質の世界を世界1って呼んで、つぎにできた意識の世界を世界2って呼んでいて、最後にできた知識の世界を世界3って呼んでるんだよ」

雄太「するとこれが、さっきいったポパーの三世界論の三つの世界なんだな」

慶介「そういうことだよ。むかしから唯物論っていう思想があるけど、これは意識とか魂なんてなくて、この世のすべては物質からできてるから、世界1しかないっていう考え方だ。これに対して、この世のすべては自分の意識のなかにあるものすべてだっていう唯心論とか観念論とかいう思想があるんだけど、これは世界2しかないっていう考え方だ」

雄太「そうすると、世界1と世界2があるっていうんだから、ポパーは唯物論者でも唯心論者でもないんだな……」

慶介「そういうことになるよ。でも、ポパーの三世界論にとって特徴的なのは、なんといつても世界3の存在だね」

雄太「知識の世界ってんだろ。でも、ポパーがなんでこんな世界があるっていうのかぜんぜんわかんないよ。だいたい世界3だけじゃなくて、いま説明してくれたポパーの三世界論って、ぜんぶもろに形而上学じゃん。ポパーは反証可能性を重んじてたんだろう。三世界論なんてぜんぜん反証可能じゃないじゃん」

慶介「たしかにそうだよ。じつはボクもこの三世界論を最初に読んだときは、なんだこれって面食らったんだよ」

雄太「そうだよ、どうしてさっき慶介が毛色が違うっていったのかわかったよ。ほんと、これまで聞いてきたポパーとぜんぜん違うじゃん」

慶介「たしかにそういう反応は少なくなかったんだ。ポパー主義者でも三世界論にはついていけないっていう人はいるんだよ」

雄太「そうだろうよ。三世界論なんて、ポパーもボケたんじゃないの？」

慶介「そこまでいうか……。でもね、これはポパーがあるシンポジウムでいったことなんだけど、三世界論っていうのは、もののたとえっていうか、こういうふうに世のなかを見たらどうかっていう一種の提案なんだよ。メタファーっていうんだけどね」

雄太「ふーん、提案ね、なんのための？」

世界3の自律性

慶介「それはね、たぶん、知識の客観性と自律性を訴えるためだったんだと思うよ」

雄太「知識の自律性？　なんだそりゃ？」

慶介「一般に知識ってものは、だれかの知識だって思われているよね」

雄太「そりゃそうだ、オレの知識とか慶介の知識とかね。だいぶ違うだろうけど……」

慶介「でもポパーにいわせれば、こういうふうに知識を主観的にとらえることは間違っているんだ。知識は客観的で、知っている人から独立していて自律してるんだから」

雄太「それってなんだよ、さっぱりわかんないな……」

慶介「そうだな、たとえば数学の知識なんかは人間から独立していて、自律してるっていいんだよ。たとえば自然数は人間が発見したものだけど、人間が知ろうが知るまいが $1+1=2$ で、これはだれがどう考えようとも変わらないよね」

雄太「そりゃそうだ。それが知識の自律性ってことなのか……」

慶介「ポパーは、知識の自律性をいい立てるために、ある思考実験を考案しているんだよ。たとえば、人間がもっている道具や機械が、そのマニュアルとかノウハウの知識といっしょにぜんぶなくなっちゃったとする」

雄太「ハリウッドのSF映画みたいな設定だな……」

慶介「でも、その世界で、いろんな本とそれを理解する能力は残ったとする。人類はどうなるかな？」

雄太「まあ、その本読んで一生懸命勉強すれば、すぐにもとに戻れるかもしれないね」

慶介「うん、そうだろうね。それじゃ、本もなくなったとしたらどうだろう？」

雄太「今度は、やりなおすのにずいぶん時間がかかるだろうね」

慶介「だから、ポパーは知識の世界3は自律しているっていうんだよ。知識の存在によって世界のあり方が変わるからね。要するに、世界3が世界2を通して世界1にはたらきかけているって、ポパーはいうんだよ」

雄太「ふーん、そんなもんかなあ……」

慶介「ポパーはこれとおんなじ思考実験を、ニュージーランド時代に書いた『開かれた社会

とその敵』でも書いているんだ。けれど、そのときは物質的な条件を重視するマルクス主義に反対して、知識の存在の方がよっぽど大事だっというために考えたんだよ」

雄太「へえー、そんなにまえからこんなこと考えてたんだ。たしかに、そういうことなら知識の存在が大事だってことはわかるよ。でも……」

反証可能性と世界3

慶介「それじゃべつの観点からアプローチしようか。まえにポパーのピースミール社会工学の話をしたときに、人間のやることには意図しなかった結果がともなうっていう話をしたよね」

雄太「えーと、そうだったっけ……」

慶介「ユートピア社会工学者は、自分たちが考え出したユートピアはもくろみどおり実現できるって考えてるわけだから、自分の知識もそのすべてを知っているなんて考えがちだ」

雄太「知識のすべてを知っているって？」

慶介「要するに、かぜが吹けば桶屋がもうかるみたいな、その知識が必然的にともなうすべての帰結もひっくるめぜんぶ知ってるってことさ」

雄太「でもそりゃムリだよな」

慶介「そう、ムリなはずだけど、でもよく忘られることだよ。それを端的に物語っているのが、意図しなかった結果ってもんなんだ」

雄太「こんなはずじゃなかったっていうこと？」

慶介「そうだ。知識はたしかに頭のなかにもあるけど、でも外的な客観的な世界について語っているよね。そしてこの世界にはまだまだ知られていないことがたくさんある。ってことは、知識は一方の足を未知の領域につっこんでいるんだよ。そして、その部分が思いもよらない結果をもたらすんだよ」

雄太「まっ、考えてみりゃ未来のことなんてだれもわからないもんな……。でも知識はそういう未来のことについても語ってるってわけだな……」

慶介「このことをポパーの弟子のパートリーって人は、『知識はそれを生み出した本人にさえ十分に知られていない産物だ』なんていい表わしている。ボクたちは自分たちがなにについて話してるかを決して知らないってね」

雄太「その話はわかったよ。でも、なんで知識の自律性なんかをそんなにいい立てる必要があるんだよ？」

慶介「ボクの考えではね、知識には未知の自律的な部分があるからこそ、その部分に対して自分たちの態度とか理論とかを開かれた状態にしておかなければならないんだ」

雄太「それって、反証可能性の話だったんじゃない？」

慶介「そうだよ。知識が自律してるってことを示してる意図しなかった結果ってのは、いってみりゃ反証みたいなものだよ。予想外のものだっていう意味ではね。こう考えるとポパーの反証可能性と世界3はつながってくるように思えるんだけどね」

雄太「もう少し具体的に話してくれないかな……」

アインシュタインよりも賢い鉛筆

慶介「そうだな……。そうそう、雄太はプログラミングをやってるよね」

雄太「まあね、趣味みたいなもんだけど……」

慶介「いやいや、だいぶすごい腕をもってると思うよ。でも、はじめてからまだあまり時間がたっていないのに、どうしてそんなに上達したんだい？」

雄太「そうだな、もしオレの腕がなにほどかのもんだとしたら、そりゃパソコンのおかげだと思うよ。だって、プログラムを組んだらすぐ

に動かすことができ、バグがあったらすぐにエラーを出してくれてすぐわかるからね。だれに聞かなくてもパソコンがどこが間違ってるか教えてくれるんだよ。英語の勉強はこうはいかないね……」

慶介「なるほど。ところで、雄太はわざとバグをだそうとしてるわけじゃないだろ」

雄太「もちろんだよ」

慶介「でもそれはパソコンが教えてくれる。ってことは、パソコンは意図しなかった結果をはっきりと教えてくれる能力をもってるんだっていえるよね」

雄太「そうか、そういういい方もできるかもしれないな……」

慶介「そうするとだね、バグを出してなおして、またバグを出してなおしてっていうプログラミングのプロセスは、まさにポパーがいつている推測と反駁のプロセスとおんなじなんじゃないか？」

雄太「ふーん、そんなもんかな？」

慶介「このことをね、ポパーは世界3が世界2に働きかけてるっていうんだ。つまり、客観的知識が雄太の意識に働きかけてるってことさ。ポパーはこのことを、『わたくしの鉛筆はわたくしよりも賢い』っていうアインシュタインのことばを使って説明してるんだ」

雄太「鉛筆がアインシュタインよりも賢いつてか！」

慶介「つまり、鉛筆で書いたアインシュタインの知識が逆にアインシュタインに影響を及ぼして、新しい発見をもたらしたりしたってことさ」

現実目に向けろ

雄太「要するに、意図しなかった結果を通して知識が人間なんかに影響を及ぼす可能性を強調したくって、ポパーは世界3なんていい出したのかな？」

慶介「それもあるだろうけど、やっぱり主観的な知識の見方に反対したいっていう気持ちもあっただろうね。まえに、ポパーが実証主義をとことん批判したっていう話をしたよね」

雄太「論理実証主義のことだろ」

慶介「そうそう。実証主義っていうのは、どんどん突き詰めていくと、主観的な方向に走ってしまうんだよ」

雄太「えー、そうなの？ だって、主観的な勝手な思いつきじゃダメだっていって、経験にもとづいた実証可能性を主張したんじゃないのか？」

慶介「最初はそうだった。でもその経験ってものをどんどん突き詰めて考えていくと、結局は自分の、自分だけの経験ってことにいきついちゃうんだ」

雄太「そうすると、この世界は自分が経験してるだけのものってなっちゃうのか……」

慶介「そうだね。それになによりも、ポパーが批判したのは主観的な方向に確実性を追い求めようとした帰納法とか帰納論理だよ」

雄太「っていうと？」

慶介「ポパーにいわせれば、確実性なんて客観的じゃなくって、十分な知識にもとづいてないのに信じ込もうとする感情なんだって。それに、この感情は思い込みを強くしてしまうから危険でもあるっていうんだ」

雄太「そういうことってあるよな……」

慶介「でも、こういった感情は主観的なものでしかないだろう。だからこういう方にばかり目がいつちやうと客観的な現実を見うしなうて、気がついたときにはとんでもないことになってたなんてことになりかねないよ」

雄太「なるほど、自分に都合のいいことばかり見てないで、現実にも目を向けろってわけか」

ユートピア主義批判と世界3

慶介「だから、もちろんいいことばかりじゃ

ないんだ、意図しなかった帰結ってのは……」

雄太「まあ、そりゃそうだろうよ」

慶介「ポパーは、自分が楽観論者だってことをいつでも公言していた。予言者気取りで将来について悲観的なことばかりいっているはやりの思想家たちを批判して、決して希望を失わないようにって、いつでもみんなを勇気づけていたんだ」

雄太「オレたちみたいな凡人をおどかさインテリっているよな……」

慶介「それでも、の一てんきな思想家とは違って、きちんと警告すべきところは警告していたんだ。そのひとつが世界3だと思うよ」

雄太「最近では技術を過信したのか、たんになにもしなかっただけかわからないけど、予想外の重大事故とかときどきあるよね」

慶介「それほど大きな問題じゃなくっても、雄太もプログラムを書いてるんだったら、そういうの経験あるだろう」

雄太「あるある、泣きたいほどあるよ。プログラムってやってほしいと思ったことをやるんじゃなくて、やれといったことをやるってよくいわれるけど、ほんと嫌になるほど思い知らされてるよ。それでこのまえも徹夜しちゃったんだけど……」

慶介「そうだよな。だからね、ポパーは三世界論でもって、客観的な知識は意図しなかった帰結をともなっているんだから、それを忘れたら大変なことになるゾって警告してるんだと思うよ」

雄太「でもそれって、ユートピア主義に対する批判でもあるんじゃない？」

慶介「そうさ、だからポパーの三世界論と社会論はこの点でつながってるっていいと思うよ。たとえば、ポパーは晩年にはよくテレビの青少年に対する悪影響を警告してたけど、テレビなんかも典型的に世界3に属してるっていえるんだよ」

雄太「最近、キレる子供たちがふえてきてるけど、これも世界3にあるテレビの意図しなかった帰結なのかなあ……」

慶介「考えてみりゃ、こういうのほかにもいろいろあるよね」

雄太「なるほど、さっきは三世界論なんて、それまでのポパーとぜんぜん違うじゃんて思ったけど、こうやって反証可能性とかユートピア主義批判とかとのつながりを指摘されると、だんだん違和感がなくなってきたよ……」

禁断の惑星

慶介「ところで、世界3の意図しなかった帰結ってことを考えるとき、いつも思い出す映画があるんだ」

雄太「へえー、それってなに？」

慶介「『禁断の惑星』っていうSF映画だよ」

雄太「知ってるよそれ。SF映画の歴史に残る不朽の名作だろ。えーと……、それでどういうストーリーだったっけ……」

慶介「まあ、世界3に関係あるところだけかいつまんで話すと、こういう映画だよ。宇宙探検隊がある惑星に到着した。その惑星にはむかし高度に発達した文明があったんだけど、なぜか滅亡してしまっていた。やがてその惑星でいろいろな事件が起こるにつれて、どうしてその文明が滅亡してしまったかがだんだんわかってくる……」

雄太「なんだか、ミステリーチックだね」

慶介「そう、なかなかおもしろい映画だったよ。ところでその文明は、滅亡まえに頂点に達していて、人々は望んだことが現実になるマシンを開発したんだよ」

雄太「へえー、打ちでの小槌みたいじゃん。オレもそのマシン欲しいな」

慶介「そうかな、やめといた方がいいと思うよ」

雄太「どうして？」

慶介「それはね、そのマシンを動かしたら怪物が現われて、人々を皆殺しにしたんだって」

雄太「えーっ、どうして？」

慶介「フロイトの精神分析学理論では、人間の無意識にはイドとか呼ばれているどろどろした破壊欲とか攻撃欲のかたまりがあるらしいんだ。それで、なんでも望みがかなうマシンはこのイドを現実の怪物にしてしまったってわけさ」

雄太「なるほど、そういうことか……」

慶介「どうだい、これなんか意図しなかった帰結の最たるものだろう」

雄太「うーん、オレなんかそんなマシンもっちゃったら、軽犯罪法にひっかかるかも……」

慶介「えっ？」

雄太「まあ、それはともかくとして……。そういう話はいっぱいあるよね。『ターミネーター』に出てきたスカイネットなんかもそうだよね……」

慶介「そうだね。でもあの映画では、明日知ることを今日知っちゃっているよ」

雄太「でも、世界3をフロイトの理論と結びつけて見るなんてねえ。だって、ポパーはフロイトを批判してたんだろう」

慶介「それはさっきもいったろう。ポパーはフロイトの精神分析を高く評価してたって。だから、フロイトの理論にはもっと発展して欲しかったから、あんなに批判したんだよ」

雄太「おっと、そうだったっけ……」

決定論を批判する

慶介「でも、そうはいつでも、やっぱりポパーの三世界論は、なんといっても形而上学だからね。ボクもあんまりうまく説明できた気がしてないんだ……」

雄太「でも、なんとなくわかったよ。オレもこの手の話は、それなりに聞いておくよ」

慶介「でもね、じつをいうと、ポパーが形而

上学的な発言をしたのは、この三世界論がはじめてじゃないんだ」

雄太「っていうと、若いころにも似たようなこと考えてたの？」

慶介「さっき『ポストスクリプト』っていう本の話をしただろ。『探求の論理』の誤解をただすために書いたこの本のあとがきのことさ」

雄太「なんか、ずいぶんとふくらんだとかいってたよね」

慶介「そう、それで三巻に分けられて出版されたんだけど、その第二巻の『開かれた宇宙』っていう本で決定論を批判してるんだよ」

雄太「決定論って、聞いたことあるけどなんだったっけ？」

慶介「決定論っていうのは、この世のなかで起きるどんな出来事も、すでに起きるまえからぜんぶ決まっていたっていう考え方さ。ボクがこうやっていま、雄太にポパーの話をするってことも、このまえ雄太が駐車違反でつかまっていたってこともさ」

雄太「へえー、すげー考え方だな。でもさ、もしそうだとしたら受験生がやる気なくしちゃうんじゃないの。だって、受けるまえから受かるかどうか決まってることになるんだろ」

慶介「そうだよな、だから決定論が正しいとすると人間の自由はなくなる。自由がないんだから、責任もない。だから、どんな犯罪でもその罪を問えなくなる」

雄太「だったら、このまえの駐車違反も許してもらえるかな？」

慶介「ボクが警官だったら、違反切符を切ることも決まっていたというだろうね」

雄太「トホホ……でもさ、そうだとしたら決定論が正しいってどうしてわかるんだよ？」

慶介「はっきりいって、どうやったってわからないさ。なにが起きてもすでに決まっていたといえるからね。だから、決定論は反証不可能な形而上学なんだ」

雄太「それで、ポパーはそんな形而上学を批判したのか？」

慶介「そうなんだ。決定論を批判して、決まってる出来事だってあるって考える非決定論を唱えたんだ。そうすれば、人間には自由があることになるからね。でも、これももちろん形而上学さ」

雄太「でも、どうやって批判したんだよ？　だって、テストできないんだろう？」

ラプラスのデーモン

慶介「まあ、ポパーは決定論をそのまま批判したわけじゃない。『科学的』決定論ってものを批判したんだ？」

雄太「『科学的』決定論って？　決定論に科学的なもんなんかあるのか？」

慶介「あるんだよ。っていってもポパーが考えたもんだけどね。近代科学を象徴しているのは、やっぱりなんといってもニュートン理論の大成功だろう。なんといっても、惑星とかの天体の動きを単純な原理から正確に予測して、それがことごとく的中したんだからね」

雄太「それで、この世のなかの出来事はすべて天体の動きみたいにあらかじめ決まってるって考えた人がふえたわけか？」

慶介「うん、しかもそれだけじゃない。ニュートン理論でぴたりと予測できたように、その決まっていることをあらかじめ知ることができるって考えたんだよ。しかも、占いとかがいい加減な手段じゃなくて、きちっとした科学的方法でね」

雄太「なるほどね、当時の人たちはニュートン理論に感動したんだろうね」

慶介「それで、ラプラスっていう一八世紀のフランスの物理学者で、思い込みのはげしい人がいたんだけど、ラプラスは、この世のすべての現在の状態を知ることができて、それを瞬時にニュートン理論で処理できる能力のある魔物

がいたら、そいつは未来をなんでも見通せるだろうっていったんだよ」

雄太「へえー、すげーこと考えるな、ラプラスって」

慶介「この魔物はラプラスのデーモンっていわれてるんだけど、ポパーが批判している『科学的』決定論ってのは、要するにこのデーモンなんだよ。『科学的』決定論っていうのは、世のなか決まってるっていうだけじゃなくって、その決まってるってことが科学的にまえもってわかるっていったるわけだよ」

雄太「なんでもお見通してやつね」

慶介「ただたんに決まってるっていうだけじゃ、『明日は雨が降るか降らないかどっちかに決まってる』っていうのとたいして変わらない。でも、具体的な出来事を正確に予測してそれがピタリとあたったら、やっぱりみんな感動するんじゃないかね」

雄太「感動するっていうより、こわいよな。オレの将来もわかっちゃうんだからな……」

慶介「そうだな……それほどこの『科学的』決定論には力があるってことだ。だからこれを突き崩すことができれば、決定論はまたもとの中身なしの形而上学にまでおしもどせるってポパーは考えたんだよ」

過去にいつて未来を教える

雄太「なるほどね、それでポパーはその『科学的』決定論をどうやって批判したんだ？」

慶介「うん、ポパーの批判はじつはいろいろあって簡単に話をするとはむずかしいんだけど……。そうだな、わかりやすいところから話をしようか。たとえばさっきヒストリシズムの話をしたとき、ポパーが『明日知ることを今日知ることができるか』っていつて批判してたよね。この批判は、じつは決定論にもあてはまるんだよ」

雄太「っていつと？」

慶介「明日知るはずのことが今日わかっちゃうってことは、いつてみりゃ、タイムマシンで過去の世界にいつて、その時代の人たちにこれから起きることをしゃべっちゃうようなもんだよ。そうするとどうなる？」

雄太「SFなんかでよくいわれてることだよ。たとえば、ロシアの冬があんなにはやくくるってわかってたら、ヒトラーはロシアに攻め込む時期を変えてただろうね。そうしたらロシアはドイツに征服されるので、歴史の筋書きが狂っちゃうってね。実際、『ターミネーター』のスカイネットはそれをやろうとしたし……」

慶介「そうだよね。ラプラスのデーモンは人間のあたまのなかもちろんすべて物質でできてるって考えるから、『明日知ることを今日知ることができる』っていつてはずだけど、これにはいま雄太が指摘したような矛盾が含まれるわけだよ」

相対論で論じる

雄太「なるほどね。でも、これって人間に関係してることだけど、人間がぜんぜん出てこない宇宙の世界での決定論はどうやって批判できるんだい？」

慶介「そうだな、そういう場合についてもポパーはいろいろな議論を展開してるんだけど、ここでひとつおもしろい議論の話をしようか」

雄太「おもしろいつて？」

慶介「アインシュタインの相対性理論を使った議論なんだけど、それによると予測が予測になるにはどうしても間に合わないっていつて結論が出てくる」

雄太「ふーん、たしかにおもしろそうだな」

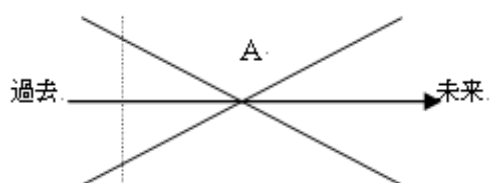
慶介「相対論では、光速度不変の原理ってのがあつて、どんなものでも光よりも速い速度で動くことはできないんだ」

雄太「そこらへんくらいまでなら知ってるよ」

慶介「そうするとね、これはミンコフスキーって人が考えたんだけど、宇宙のなかでいまここに因果的に影響を及ぼせる範囲を図にするとこうなるんだ。点Aがいまここで、左が過去、右が未来で、横線は時間軸だ。上下方向は空間の広がりだ。そして、斜めの線で区切られた三角の内側の左の部分は光の速度以下でAに到達できる過去の範囲、右の部分は光の速度以下でAから到達できる未来の範囲だ。だから、この外側の領域からAから到達するためには光速を超えなきゃいけないから、原理的にAからは見えない、聞こえない、なんの影響も及ばない領域だよ」

雄太「なるほど、おもしろい図だね。それで……」

慶介「うん、もしラプラスのデーモンがいて、



Aの出来事を完璧に予測しようと思ったら、過去のどこでもいいんだけど、たとえば点線で示した過去の三角形の底辺の出来事の情報すべてが必要だ。三角形の外側の情報はまったくいらなくても、内側の情報はどれが欠けても完璧な予測にはならないんだよ」

雄太「なるほど、そうなるね。それで、それで……」

慶介「ところで、この底辺の情報がもっともはやくひとつに集められる点はどこだろう？」

雄太「えーと、Aの出来事を予測するために集めるんだから、Aより過去、つまり左じゃなきゃならないよね」

慶介「そうだ、Aを予測するためにはAより過去に情報が集まらなきゃダメだ。でももっともはやく集められるのは、じつはAの点なんだよ」

雄太「えっ、なんで？」

慶介「だって、三角形の底辺の両端の情報は光の速度でやってきて、ようやくAに達するわけだからね。もし光よりも遅けりゃ、Aよりも右側でこの場所に到着するんだよ」

雄太「あっ、そうか！」

慶介「そうして、それから集めた情報を使って計算をはじめる。たとえ瞬時に計算できたとしてもどうしてもAよりまえに計算結果を出すことはできない。Aが起きるときに予測に必要な情報がくるんだから」

雄太「なるほどね、それで予測が遅すぎて予測にならないってわけか……」

算出可能性の原理

慶介「でもね、『開かれた宇宙』でポパーが展開している決定論批判は、おもに予測の量的な精度を問題にしてるんだ。つまり、どれほどの正確な予測をするためには、どれだけの精度のデータがまえもって必要かをいえるかどうかっていうことを問題にするんだ」

雄太「うーん、よくわかんないな？」

慶介「たとえば、『科学的』決定論者がある科学的予測をおこなって、それがはずれたとする。でもその決定論者は平気だ。予測に必要な初期条件のデータがたりなかったからだっていい逃れができるからね。たとえば、さっき『ある糸にその張力の限界を超える重さを加えると、いつでもその糸は切れる』っていう法則の話をしたけど、いくら『科学的』決定論者でも、ぶら下げた重りの重さがわからなければ、糸に重りをぶら下げて切れるかどうか予測できないだろう」

雄太「そりゃそうだな……」

慶介「だから、こういういい逃れを許さないために、それじゃどれくらい詳しいことがまえもってわかってたら、そういういい逃れをしないのかいってみろよって、ポパーは『科学的』決定論者に迫るんだ」

雄太「それってなんだか反証可能性の規準に似てないか？　どういうことが起きたら理論が反証されたって考えるかまえもっていえっていう……」

慶介「そうだよ、似てるよね。ポパーはこれを算出可能性の原理って呼んでるんだよ。つまり、予測に必要なデータの精度をまえもって算出しておけてことだね」

雄太「なるほど、逃げ道をあらかじめふさいでおいて、たたいてるんだな」

慶介「そうなんだ。そうしたうえで、ポパーはいろいろな物理学上の専門的な議論を使って、そういう算出可能性の原理は成り立たないぞって論じてるんだよ」

雄太「うーん、なんだかむずかしそうだな……」

コペンハーゲン解釈を批判する

慶介「もっとも、ポパーの議論とおんなじような議論は、すでに現代物理学の量子力学の分野で出されてたんだよ。つまり、電子なんかの粒子の位置と運動量を、ある限度以上の精度で同時に測定することはできないっていう結論だ。これは不確定性原理って呼ばれている。それで、この原理のために決定論的な世界観は崩壊したってよくいわれるんだ」

雄太「それじゃ、ポパーは決定論批判に量子力学の成果を使ったんだね」

慶介「ところがそうじゃないんだ。ここんところは事情が複雑なんだけど、ポパーは量子力学を批判してるんだよ」

雄太「えっ、どういうこと？　いまの慶介の説明だと量子力学は決定論を崩壊させたってい

うように聞こえたんだけど……」

慶介「そうだよ、たしかに量子力学は決定論を崩壊させた。そして量子力学のこの部分にはポパーも同意している。それどころか、量子力学の非決定論的な世界観を批判しつつけたアインシュタインの決定論的な世界観を批判してる部分もある」

雄太「アインシュタインはポパーにとってのヒーローだったのに……」

慶介「ポパーは量子力学の非決定論にも、数学的な理論構造そのものにも反対してない」

雄太「それじゃあポパーはいったい量子力学のなにに反対したんだよ？」

慶介「量子力学っていう理論は、おもにデンマークのニールス・ボーアっていう物理学者を中心にしたグループによって建設されたんだ。それでこのグループは、ボーアのいた地名をとってコペンハーゲン学派って呼ばれている。ポパーはおもにこのコペンハーゲン学派の量子力学解釈を批判したんだよ」

雄太「それってどんな解釈なんだ？」

慶介「まあ、これについてはいろんな論争があって、簡単にいい表わすのはむずかしいんだけど、あえてポパーの批判した部分を要約してみると、それは電子なんかの素粒子は観察された状態しか意味をもたないっていう考え方なんだ」

雄太「どうしてそんな考え方するんだよ？」

慶介「それはね、電子なんかは観察されているときは粒みたいなもんだけど、観察されてないと波みみたいな振る舞いをして、観察されてるかされてないかでぜんぜん違ったものになるからなんだ。それで、コペンハーゲンの人たちはこうした現象をどう統一的に解釈すればいいか悩んだあげく、見られてないことについてなにか語ろうとするから大変なことになる、だからそういう部分は考えなくたっていいっていうようなことをいったんだよ」

雄太「見えないことは考えないのか？」

慶介「たとえば、電子を粒だって思うとそれは軌道を描いて運動してるって思いがちだけど、でもだれも電子の軌道なんか観察してない。だから電子の軌道はこうなってるはずだなんて頭のなかだけで考えあぐねるのはやめて、観測できることだけ相手にすりゃいいんだっていうことなんだよ」

雄太「でもそれって、ポパーが批判した実証主義の考え方に近いんじゃないの？」

慶介「そうなんだ、実際、コペンハーゲン解釈と論理実証主義はなんか関係があったらしいよ。それで、ポパーがとくに問題にしたのは、観察するかしないかによって物理的なものが変わったりするんだから、量子力学は人間の意識を扱ってるんだっていうような主観主義的な考え方なんだ」

雄太「ふーん、ポパーならそういう考え方を批判するだろうな」

慶介「でも、理論家の多くはポパーのコペンハーゲン批判は、あまりうまくいってないと思ってるらしいんだ。でも、量子力学についてのポパーの議論のうちで、ひとつだけ重要なことがある。それは、確率についての考え方なんだよ」

確率の主観的解釈

雄太「どうしてここで確率なんか出てくるんだよ？」

慶介「うん、量子力学はニュートン理論と違って、現象を統計的、確率的に予測するんだ。だから、電子なんかの素粒子の集団の統計的な振る舞いについては、量子力学はじつにみごとな予測を立てられるんだけど、一個の電子がどうなるかについては確率的なことしかいえないんだ」

雄太「ふーん、それって、この素粒子がこの場所にやってくる確率は1－2だっていうよう

なもんなのかな？」

慶介「まあ、そんな感じなんだけど、こうした確率的な性格をアインシュタインは、量子力学の不完全さの現われだっていって批判したんだよ」

雄太「それってどういうことなんだ？」

慶介「さっき、ラプラスのデーモンのお話をしたよね。ボクたちにはわからないけど、このデーモンならサイコロを振るときの微妙な手の動きとか、サイコロが落とされる速度とか角度なんかぜんぶ知ることができる。それでこうした初期条件を使えば、サイコロの目が出るまえにどの目が出るかわかることになる」

雄太「なるほど……。それじゃアインシュタインは、まだわからないことが残ってるから確率的なことしかいえないんだっていうわけだな」

慶介「そうだよ。だからそれを研究しなきゃいけないのに、確率的な予測で満足しちゃってるようじゃダメだっていうわけだよ。でも、こういうアインシュタインの考え方には、世のなかの出来事はぜんぶ決まってるはずだっていう決定論的な見方があるよね」

雄太「糸にぶら下げた重りの重さがわからないから糸が切れるかどうか確定的なことはいえないけど、ほんとうはぶら下げるまえから切れるかどうか決まってるってわけだな」

慶介「こういう考え方からすると、確率の値っていうのはどれだけのことを知ってるかに依存することになる。つまり、ぜんぶ確実にわかっているらば確率1で予測できるけど、知らないことがあればあるほどその値が下がっていくっていうわけだよ。なんにも知らなきゃ、確率は五分五分だ。こういう考え方を確率の主観的解釈っていうんだよ」

雄太「なるほど……。知識が不確かだから確率が必要ってわけか……」

慶介「でも、ポパーによれば、じつは量子現

象は確率的な予測でいいんだっていうコペンハーゲンの人たちにもこの主観的な解釈があるらしいんだ。だから、量子力学は人間の意識を扱ってるんだっていうような主観主義的な考え方が成り立ってわけだよ。だから、この確率についての主観的な考え方そのものがダメなんだってポパーはいうわけなんだ」

確率の頻度解釈

雄太「それじゃ、ポパーは確率についてかわりの考え方を提案してるのか？」

慶介「そうなんだけど、でも最初のうちはミーゼスっていう人がまとめた頻度解釈っていうものを支持してたんだ」

雄太「なにそれ？」

慶介「たとえば、ふつうのサイコロを振っても最初のうちはいろいろと目がバラついて、それぞれの目の出る回数は不揃いだよね。でも、ずっと長いあいだ振りつづけていけば、やがてどの目もおんなじような頻度で出てくるようになる。それで振った回数で各目のでた回数を割ると、その値はどんどん1-6に近づいていくよね。それでその極限の値を、サイコロを振ってある目が出る確率だとしてしようって考えるのが頻度解釈だよ」

雄太「ふーん、極限っていうのがちょっとよくわかんないけど、でもなんとなくわかるよ、いってること……」

慶介「それで、この頻度解釈が確率の主観的解釈と一番違っているのは、確率の値がサイコロについてどれだけ知っているかに依存しないってことだよ」

雄太「なるほど、そりゃそうだ。サイコロについてオレがなにか知ってるからって、サイコロの目の出方が変わるわけじゃないし」

慶介「そう、いまの雄太のいい方、とっても大事なんだ。つまり、主観的な知識に依存しないっていう意味で、頻度解釈による確率は客観

的確率っていわれるんだよ」

雄太「なるほど、ポパーが好きそうな解釈だね」

慶介「そうなんだ、実際、『探求の論理』を書いたころは、ポパーは確率の解釈として、この頻度解釈を採用してたんだ」

雄太「してたんだっていういい方をするってことは、そのあと変わったんだな……」

確率の傾向性解釈

慶介「そうなんだ。ポパーは、頻度解釈のある部分に不満があった。それはね、頻度解釈じゃ単独の出来事について語れないってことなんだ」

雄太「単独の出来事？」

慶介「頻度解釈では、サイコロをおんなじ条件で何回でも振ることができるっていうことがとっても大切なんだ。っていうのも、ある目が出る確率っていうのは、その何回も振ったなかでその目がでた割合だからね。だから、ここに細工されてるかどうかわからないまったく新しいべつのサイコロをもってきて、それを一回だけ振って六の目が出る確率はもうどうだって聞いても、頻度解釈じゃ意味がないんだよ」

雄太「それが単独の出来事っていうわけだな……」

慶介「だから厳密にいうと、天気予報でいう明日の降水確率ってことも、ほんとうは頻度解釈では意味がなくなる。だって、明日とまったくおんなじ条件の日なんて、過去にも未来にも一日もないだろうからね」

雄太「ふーん、それでポパーはそういう単独の出来事についても、その確率がどうなってるかを語りたかったってわけか……」

慶介「そうなんだよ。それはなんでかっていうとね、量子力学ではまさにこういう単独の出来事が問題を引き起こしたからなんだよ。電子の集団がどういう振る舞いをするかの予測につ

いては、アインシュタインもコペンハーゲンの人たちもあまり意見の食い違いはなかったんだけど、一個の電子の振る舞いについての確率をどう考えるかで、ずいぶんと論争があったんだよ」

雄太「その振る舞いは確率的にしか予測できなかったんだよね」

慶介「そうなんだけど、でもさっきもいったように、ポパーにいわせれば、アインシュタインもコペンハーゲンの人たちも主観的な確率解釈をとっている。でも、かといって頻度解釈は一個の電子について語れないし……」

雄太「どっちにしてもダメだね」

慶介「それで、ポパーは出来事そのものに、なんらかの確率的な振る舞いをする傾向があるって考えたんだ。これをポパーは傾向性って呼んだんだ」

雄太「ふーん、傾向性ね。なんか変なことばだな……」

慶介「ポパーにいわせれば、サイコロとか、それが落ちる床とか、サイコロを振る手とかの物理的な条件がぜんぶ合わさって、そのサイコロの目の出る傾向性が決まるんだ」

オカルト的な概念か

雄太「でもさ、いまちょっと考えたんだけど、その傾向性ってテストできるの？ だって、わけわからないサイコロもってきて一回しか振らないんだろ。それでたとえば六の目の傾向性なんていえるのか？」

慶介「なかなかいいところに気がついたね。たしかに確率の値をテストするためには、何回も振ってみなきゃダメだ。なんたって確率っていうのは比率、割合だからね。だから、傾向性解釈はテストできない」

雄太「それじゃ、形而上学的なもんなのか？」

慶介「まあ、そういうことになるね。でもポパーはこういってるんだ。ニュートンの万有引

力だって、目に見えない力が遠く離れたほかの天体から及んでるなんてオカルト的だって、当時はさんざん批判されたんだ。でもいまじゃ立派な科学的概念として通用してる。だから、傾向性だってそうなるかもしれないってね」

雄太「なるほど、ポパーお得意の楽観主義かな……」

慶介「まあそういうわけじゃないだろうけど、ポパーは非決定論者なんだから、こういう傾向性を考えるのはむしろ当然だよ。だって、非決定論じゃあすべての出来事がきっちり決まってるわけじゃないって考えるだろう。でも、まったくでたらめっていうわけでもない。出来事には傾向性があるって、その値が1のものが決定論的な出来事だって考えれば、非決定論的な見方がずいぶんと広まるよね」

雄太「そういうわけで、これも形而上学ってわけか……。これまで、進化論的認識論とか、三世界論とか傾向性解釈とか、いろいろとポパーの形而上学的な理論について話を聞いてきたけど、やっぱりけっこうしんどかったよ」

慶介「まあそうだろうね、ふつうあまりなじみのない抽象的なことばかりだったもんね。でも、ポパーが決して重箱の隅をつつくようなことばかりしてるわけじゃなくて、想像力豊かな思想家だったってことがわかってもらえれば、ボクはいいと思うよ」

雄太「そりゃ十分わかったよ。でも、これじゃあポパーが実証可能性の規準に反対するわけだよ。こんなに形而上学好きじゃあ……」

慶介「まあ、そういうことだね……」

<次回へつづく>

編集後記

いつも原稿を集めるのに苦勞しておりますが、今回は皆様のご協力を得てそれなりの厚みのある機関誌を編集できました。編集部は、皆様のご投稿をいつでもお待ちしております。どうぞ、ふるってご投稿くださいますよう、いつものことながら、お願い申し上げます。

理論的問題もさることながら、現実の諸問題を論じたアクチュアルな論考は、われわれの思考を活性化してくれると考えられますので、ご遠慮なく、政治経済的問題を論じていただければと思います。ポパーの精神にならっていつでも現実問題との接点を保持し、そこから深く哲学的問題に切り込んでいただくような論考は大歓迎です。もちろん、簡単に論じられることではないでしょうが、知性の冒険を期待します。

(文責：小河原 誠)

電子ファイルの送付について

前号と同じく、本号も電子ファイルのみの作成となります。PDF ファイルを開くためのパスワードは、**Popper2013** です。ファイルは、高解像度での印刷のみを許可し、他の操作は禁止されています。これを解除するための権限パスワードは **winter** です。「アドバンスト」から「セキュリティ」へと進み、「この文書からセキュリティ設定を解除」によって解除してください。

本号についてのご意見等につきましては、編集委員（現在は、[小河原 kogawara79@hotmail.com](mailto:kogawara79@hotmail.com)）にご連絡いただければ幸いです。

+++++

電子書籍ファイル作成の便宜を図るためのガイドライン

——投稿者へのお願い——

電子書籍作成にあたってはオープン・ユースの編集ソフトウェアを使用しますが、その編集能力は特に日本語についてはまだ発展途上というのが現状です。つきましては、電子書籍ファイル作成作業の負荷を軽減するために、投稿される皆様には以下のガイドラインを尊重されることをお願いいたします。

提出するファイル

- ・Word ファイル：本文と挿入物（図、写真など）からなるもの。挿入物についてはフォルダを作成し、そのなかにまとめておいていただければ幸いです。
- ・図、写真ファイル：ファイル形式は”png”または”jpeg”とする（⇒解説参照）。ファイル名は半角英数字で「fig1(kogawara)」などとする。（したがって「fig1(kogawara).png」などとなる。）

注釈

- ・番号を付ける場合は算用数字を用いる：[1],[21]など。
- ・同一著作（たとえば[1]）からページの異なる箇所を引用する場合は、別の注釈番号はつけず、([1], p.123)、([1],p.321)、または(Popper[1990], p.123)などとする。
- ・主張したいことは本文に記述し、注釈で長文の主張をすることは原則として避ける。
(リンク作成作業を軽減するため。)

強調

- ・アンダーライン、イタリック、太字が好まし

い。

- ・圏点を使う場合は開始位置と終了位置に半角英数で下記のマーカーをつける。（ソフトウェアに圏点の編集機能が無いため。）

開始：^^

終了：/^^

（例）「下記の^^マーカー/^^をつける」

その他

- ・半角の「<,>,&」は使用しない。（HTML タグとして認識されてしまうため。）

解説

図について

- ・Kindle で使用可能な形式（拡張子）が”png”または”jpeg”なのでどちらかを使ってください。図は png、写真は jpeg とするのが普通です。
- ・パワーポイントで図を作成する方法：各パーツを描いた後、グループ化して1つの図にします。図を選択した状態で、右クリックし、「図として保存」を選択します。「ファイル名」を fig1(xxxxx) などとし、「ファイルの種類」を png または jpeg として保存します。
- ・既存のファイルを png または jpeg ファイルに変換する方法：Windows の「プログラム」⇒「アクセサリ」⇒「ペイント」と選択してペイントを立ち上げます。「編集」⇒「ファイルから貼り付け」を選択し、変換したいファイルを貼り付けます。「ファイル」⇒「名前を付けて保存」を選択し、ファイル名を付けて、「ファイルの種類」で png または jpeg を選択して保存します。

電子書籍ファイルの閲覧方法について

・電子書籍ファイルは”.epub”と”.mobi”の2形式のファイルで作成され会員に送られます。epubは以下の方法で閲覧することができます。(.mobiファイルはKindle専用で、下の「Kindleの利用方法について」をご覧ください。)

・電子ブックリーダー: Sony リーダー、楽天 kobo など、代表的なリーダーで読むことができます。ファイルの読み込みは各デバイスの取扱説明書に従ってください

・PC: ”Adobe Digital Edition”などのソフトウェアで読むことができます(Adobe社のサイトからダウンロード)。またブラウザでは Firefox にアドオンの”EPUB Reader”をインストールすれば、このブラウザで読めるようになります。

(この辺りは現時点(2013年9月)でのことで今後は大きく変化していくと思われます。)

・モバイル端末: アップル端末では”iBooks”で読むのが普通です。アンドロイド端末は日本語対応の決定版が見当たりませんが、Google Play で”epub”を検索するなどして、適当なものを使用してください。(楽天 kobo のモバイル端末用ソフトもありますが、動作確認はしていません。)

・電子書籍ファイルの読み込み: 電子書籍リーダーがインストールされている場合、ファイルをダブルクリックすれば、ファイルを開くソフトウェアの選択画面が出ますから、そこから好きなものを選びます。モバイル端末も PC メールを受信できる設定にして、ファイルをメール添付で送れば、同様にできます。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
訂正

小河原 誠

立花希一氏は、今号掲載の『ミラーとバートリーの争点とポパーの「非合理的理性信仰」について』において拙訳の誤りを指摘してくださった。

Kindle の利用方法について

・Kindle はアマゾンの提供する電子書籍リーダーのサービスであり、Kindle デバイス (KindleFire, Kindle Paperwhite など) のほか、あらゆる PC とモバイル端末で 사용할 ことができます。

・ PC 用 : 「 <http://www.amazon.com/gp/feature.html?ie=UTF8&docId=1000426311> 」からダウンロードします。

・モバイル端末など: アンドロイド端末では”Google Play”から、アップル端末および Mac では”App Store” から、”Kindle”をダウンロードして使用します。

・使い方: PC, Mac やモバイル端末の場合、Kindle ソフトウェアがインストールされていれば、ファイルをクリックすることにより、Kindle が立ち上がり、読めます。Kindle デバイスの場合は、USB ケーブルでパソコンと接続し、Kindle デバイスの「ドキュメント」フォルダに取り込みます。読むときは、メニューの「ドキュメント」からファイルを選択します。

心より感謝するとともに、該当の箇所を訂正しておきたい。

該当箇所は以下の箇所であり、下線を付した部分が誤訳として指摘された箇所である。

拙訳「第4章 包括的に批判的な合理主義——ひとつの評価——」(本誌、2013, Vol. 5, No. 1, p. 39.)

にを受け容れなを拒否するかについてのわれわれの決断が恣意的になるという危険が生じるわけではない。それは、真を発見しそれを偽から分離したいというわれわれの欲求によって徹底的に制約されているのだ。バートリーは真理に関心をもち、正当化を軽蔑していたために、彼は、真理を探究するにあたってわれわれの下す正当化されない決断を非合理と呼ぶことで、まさに最後の瞬間に物怖じしてしまったように思われる。」

「そうした決断が非合理であるなどということはないし」

「正当化を軽蔑していたにもかかわらず」

『ガイドブック』においてチャンピオンははじめに、『貧困』の各章の要点を詳細に概説する。次にチャンピオンはポパーとタルコット・パーソンズ及びルードヴィヒ・フォン・ミーゼスの方法論的比較を行う。その後「付録」として著作の半数以上のページを割き、ポパーの生涯やその一連の社会科学的著作の解説、ポパーとその協力者たちとの関係について概説し、ポパー哲学の社会科学への展開、ポパー思想の受容、反証主義がしばしば受ける誤読や誤読に対する反論を行い、経済学説史と批判的合理主義の関係に至るまでの幅広い議論を展開している。

『ガイドブック』の冒頭でチャンピオンは、ポパーが『貧困』を執筆した時代状況と執筆の意図を明らかにする。ポパーは第二次世界大戦中のナチスの足音が迫るオーストリアから 1937 年にニュージーランドに亡命後、同地で哲学者として恵まれているとは言い難い環境下で『貧困』を完成させた。同著においてポパーは、彼が 1935 年の『探究の論理』において物理学を主とする自然科学の問題を社会科学に適用しようと試み、社会科学の方法に関する多くの誤解に反駁し、かつ「歴史の決定論」の神話への論駁を企図していた。なぜならポパーは「社会科学における方法の欠陥がファシズムやコミュニズムを結果的に台頭させた」と信じていたからである。この意味において『貧困』は社会科学の方法に関する著作であるだけでなく、社会科学への誤解がもたらす誤った社会改革の在り方へ警鐘を鳴らすものである。

『貧困』においてポパーは、ヒストリシズムが社会科学の方法についても二つの誤解を挙げる。第一に社会科学はその錯綜性や複雑性ゆえに社会の「直感的理解」が重要であるという反自然主義的立場による誤解であり、第二に社会科学において歴史の研究を行えば、物理学のごとく社会・経済システムの「運動法則」、すなわち歴史の一般法則を発見できるとする親自然主義的立場による誤解である。ポパーはヒストリシズムの

方法論的誤解が歴史の一側面にすぎない「階級闘争としての歴史」を過度に一般化し、歴史は一定の軌道に沿って進展するとする歴史的決定論に賛成し、決定された歴史を幫助する急進的な社会改革や設計主義に帰結することを批判していた。ポパーの論駁の的確さは、ソ連や東欧諸国における社会主義の崩壊に言及するまでもない。また彼が設計主義への代替として提示した穏健な漸次的社会改革—ピースミール・ソーシャルエンジニアリング<つぎはぎの補修的社会工学>は、設計主義的ではない社会改革の在り方として、今日においても重要な意義を持つといえるだろう。

『ガイドブック』はポパー社会科学の包括的入門書であるが、しかしチャンピオンがミーゼスとパーソンズを取り上げ、彼らとポパーが「社会学、経済学、そして哲学を横断する統一戦線を形成」したならば、社会科学の歴史がよりよいものになっていたであろうと同著の中で結論付けるとき、三者の行為仮説の扱いにおける認識論的企図と立場の狙いを無視した弁証法的楽観論に過ぎないように筆者には思われる。それは「登山と野球と社交ダンスが協力したならばよりよいスポーツが生まれたであろう」といった命題に似ていて、運動という点において共通しているという点にのみ着目し、それぞれの狙いや特徴を無視した議論に私には思われる。確かに三者は個人行為の結果として社会現象を説明すべきであると考えた点において共通しているが、行為仮説を社会科学理論の中にどのように位置づけるかについて、まったく異なる方法論的立場をとっていた。

ミーゼスは個人行動を「目的合理性」概念による先験的真理とみなし、その体系における行動仮説はいかなる反証も不可能である。なぜならミーゼスは、方法論的個人主義に基づく社会科学の正当化（当時のミーゼスにとっては自由主義の正当化）を意図しており、観察とテストによる社会科学理論の批判や発展の余地をまったく認めていなかった。オーストリア学派第三世代のミーゼス

は、弟子のハイエクを介して学説史上はポパーから遠くない距離にいてもいえるが、彼は反証主義について俗流の浅薄な理解しか有しておらず、社会科学の先験的妥当性を主張することについて驚く程頑なであった。

私の理解する範囲では、パーソンズは帰納主義的な方法によって行為仮説を導いたため、行為モデルから導かれた社会科学法則のテスト可能性について十分な説明を与えなかったように思われる。私にはミーゼスの目的合理的行為以上に、パーソンズの行為概念によって市場や社会制度を説明する社会科学法則、その法則のテスト可能性について想像することが困難である。それは「明日のゲームの試合結果は選手の精神力と技術力、監督の戦略とチーム同士の相性の相互作用によって決まる」といった、それ自体偽ではないしその証左を観察の中に見出すことはいくらかでも可能であるが、法則のテスト可能性を示していないために予測が困難な命題に似ている。行為仮説の経験内容が豊かであるということが、そこから導かれた社会科学法則の妥当性や批判とテストによる理論の発展可能性を担保するわけではない。

『貧困』においてポパーは、社会科学において法則のテスト可能性や予測をどのように担保するかという問題意識に基づき、行為仮説における合理性原理を導入することを提案している。ポパーは当然ながら、人間がすべからく合理的に行動するなど信じて合理性原理を提示したわけではない（人間行動の合理性の反証を我々は日々経験している）。チャンピオンが解説するように、ポパーは合理性原理を一般原則や反証可能な命題としてではなく「ゼロ方法」として、すなわち人間がある状況で合理的に行為していたならばこういった行動を採っていたであろう、という基準を提示しつつ、そこからの乖離として行為を観察するという方法論を提示した。ポパーが提示した「ゼロ方法」が現在実験経済学で用いられてい

る方法、すなわち一方における完全合理性と利潤最大化行動を前提する効用関数と、他方における観察された実験データを比較し、その乖離を理論的に説明する方法とほぼ同一であることを顧慮するならば、その行為仮説の方法論的位置づけにおいて優れた先見性を認めざるを得ない。ポパー、ミーゼス、パーソンズの三者の社会科学方法論の隔絶を考えるならば、それぞれの長所を持ちあっていたならばより素晴らしい社会科学が出来上がったであろうとするチャンピオンの主張が、弁証法的楽観論に過ぎないことは明らかである。様々な立場からの批判的議論は科学の発展に不可欠であるが、異なるテーゼを突き合わせたからといって両者を超克するテーゼが必然的に生じるという認識論的根拠は存在しないし、三者の議論を想像することは私には困難である。

チャンピオンの楽観論を離れてポパーの『貧困』を現代の視点から再読するならば、社会科学における「古典」として同著はどのような意義をもつだろうか。『ガイドブック』はポパー社会科学の入門書として成功しているが、再読されるべき古典としての『貧困』の価値について不十分な説明しか与えていない。ポパーの指摘した設計主義や全体主義の問題はソ連邦の崩壊によって歴史的に検証されたとすることで、同著は komunism 批判の歴史的著作としてのみ価値をもつにすぎないのだろうか。

ポパーの批判したヒストリシズムの問題は、急激な規制緩和と市場開放を推し進める市場原理主義の形式において、現代の社会政策の現場に繰り返し再現されているように筆者には思われる。自由な市場取引が価格決定メカニズムによる効率的な資源配分を行い、市場競争によって経済が活性化することは重要な経済の一法則である。しかしこの社会科学の一側面である市場の効率性を過度に一般化し、社会生活のあらゆる側面に市場原理を適用し、急激な市場開放や規制緩和を推し進めたならば、ふたたびヒストリシズムの犯し

ポパーは設計主義的で急進的なコミュニズムを批判し自由主義陣営の側にいたが、その対案として市場に任せればすべてうまくいくという神話を信じていたわけではない。チャンピオンが述べるように、ポパーは市場を国家や政府などの社会的制度の一つとして認識しており、個人的行為の結果としての社会制度を説明する理論が必要であると考えていた。そして社会政策は彼がピースミール・エンジニアリングと呼ぶ試行錯誤を含む漸次的な改革によって進められていくべきで

ポパーが歴史の中で対峙した問題とその解決として『ヒストリシズムの貧困』を再読するとき、彼の現実的で穏健な社会改革への慧眼が、現代の社会政策へ与える示唆を再確認することができる。チャンピオンの『ガイドブック『ヒストリシズムの貧困』』が、『貧困』の古典としての現代的意義を十分に示したかどうかには議論の余地があるが、同著はポパー社会科学へのよき入門書である。

46

りから学ぶ教育に向けて』¹勁草書房、二〇〇〇年)

小河原 誠

わたくしは、教育学理論へのポパーの影響を主題として研究しているわけではないのだが、最近になってたまたまパーキンソンによる上記二冊の書物に目を通すことをえた。かれは、アメリカ教育史学会の会長を務めたこともある人物で教育学関連の多数の書物を執筆しているようであ

¹ わたくしは、最初、この訳本の方を読んでいたのだが、ポパーを論じている第二章で訳文の日本語としての意味がよくくみ取れなくなり、原書のほうに切り替えて読んだ。原書はじつに明快で分かりやすい英語で書かれている。以下に、訳についての苦情を書くが、それはただ、部分的にのみ照らし合わせただけのこの第二章にのみかかわるのであって、訳書全体にかかわるものではないことを明記しておきたい。

「反証可能性」という訳語は日本では古くから定着していると思うが、この訳本では、「誤りを証明し得る可能性」と訳されている。これは、説明的訳語で読者にサービスしている訳語だと思う人がいるかもしれないが、さにあらず。ポパーはどこかで、数学や論理学とは異なり経験科学の世界では「証明」はありえないと語っていたと思うし、誤りを証明したという反証なるものが決定的ではないことを力説していた（たとえば、『科学的発見の論理』第九節）。ポパー自身は、反証は決定的（decisive）ではないと述べていたにもかかわらず、ポパーへの批判者は、じつに奇妙なことに、「反証は決定的でない」と主張することによってポパーを批判できたと考えていた。こうした信じられないような批判が出てきたのは、ポパーは反証とは誤りを決定的に「証明」することであると考えているという誤った思い込みを批判者もっていたからである。まさにこの思い込みを日本語訳は増幅するのではないか。筆者は、いま、憤りに近いものを感じている。さらに、trial-and-error elimination が「試行錯誤の排除」と訳されている。「試行錯誤の排除」とはいったい何のことなのだろう。パーキンソンが至る所で試行と「誤り排除」であると説明しているにもかかわらず、この訳語である。啞然とせざるをえない。もっとも、第二章の担当者ではないひとが訳したと思われる箇所では正しく訳されているのであるから、訳者たちがどれほどの共同作業をしたのかは、はなはだ疑問になる。「訳者あとがき」には「訳出にあたっては、まず訳者各自が全訳を行い相互に訳文を検討して訳語の統一をはかり、次に訳文の全体的な調整を平野が行った」とあるが、筆者にはまったくもって信じられない話である。このほかにも奇妙な訳語とか、文法的誤りと思われるものがあるが、ここでは触れない。パーキンソンがみずからの理論の基礎としているポパー哲学が、このような誤訳で傷ついているのは、残念というよりも、読者に対して害をなすといえるような気がする。

る（一九九三年の方の書物に少し詳しい経歴が載せられている）。日本にはかれの業績をトータルで紹介することのできる優れた方がいるだろうと思うし、また、教育学へのポパー哲学の影響全体を俯瞰できる方もいるだろうと思うので、そのような方がパーキンソンの仕事を全体的に論評されるのがもっともよいことだと思う。とすると、わたくしのような者がパーキンソンの教育理論とポパー哲学との関連という・限定された視野のもとで二著を取りあげ、簡単な読書感想文のようなものを書いたところで、有害無益かもしれない。しかしながら、ポパー哲学を教育に具体的に応用していく努力の必要性は、ポパーについてのなにがしかの理解をもっているひとならなんぴとも否定しないだろうと思うので、パーキンソンにおけるその努力の一端たりとも紹介して批判的合理主義の可能性への関心をわずかなりとも呼びおこす一助にでもなればと思い、筆をとった次第である。

わたくしが最初に読んだのは『教師にゴールなし、生徒に目的なし』の方だが、紹介の順序は『誤りから学ぶ：二〇世紀教育論の再解釈』の方から始めた方がよさそうに思われる。パーキンソンの執筆の順序からしても、また理論の展開からしてもそうではないかと思われる。

さて、『誤りから学ぶ：二〇世紀教育論の再解釈』においてパーキンソンは主としてポパー哲学を認識論として捉え、二〇世紀のいくつかの教育論、ピアジェ、スキナー、モンテッソーリ、ニール、ロジャーズの理論を、教育とは学ぶ者の成長であるという観点から論じている。かれは、これらの理論は、誤りから学ぶという精神を萌芽的にもっていたと論じ、最終的に進化論的認識論——このとき、ポパーの進化論的認識論が考えられている——のもとに統合していこうとしている。

かれの構想は、Part I に明瞭である。かれは、教育の理論は歴史的に見て大きく三つの理論が

あったと考え、それを（文化あるいはエリートへの）「イニシエーション」、「印刷」、「成長」ということば——かれの言い方ではメタファー——でとらえている。

教育を「イニシエーション」と捉える理論は、プラトンに帰せられていて、教育とは基本的に貴族階級の子弟を支配者にするための手ほどき、あるいは、文化一般（人類の価値ある遺産）への手ほどきとして理解されている。

教育を「印刷」とする見方を露骨に語った最初の人物としてはコメニウスが挙げられている。この理論は、産業化の進展のなかで、労働者に知識を伝達してかつ社会のなかに統合すること（社会化）を課題としており、学ぶ者は知識を刷り込まれるだけの受け身の存在者として捉えられている。これは、あきらかにポパーのバケツ理論のストレートな適用であろう。

教育を「成長」ととらえる理論においては、外界に対して何らかの期待あるいは仮説をもって生まれてきたもの（生物）が試行と誤り排除をつうじてそれらを修正しつつみずから成長させていく過程（批判による知識の淘汰過程）が根本に据えられている。学ぶとは知識を外部から注ぎ込まれることではなく、すでに内部にある予想とか期待を修正していく過程であるとされる。これは、パーキンソンによってダーウィンの理論と呼ばれているが、かれが自認しているようにあきらかにポパーの進化論的認識論を教育という場面において咀嚼したものと言えよう。

パーキンソンの関心は、当然といえば当然なのだが、進化論的認識論を理論的に掘り下げていく方向にあるのではなく、上述したような教育についての三つの理念型を念頭において主として 20 世紀の教育理論——先に言及した思想家たちの理論——を分析し、そこに、人間の可謬性についての自覚、誤りから学ぶことについての萌芽的洞察、およびさまざまな試行があったことを明らかにし、それらを進化論的認識論にもとづく「成長」

の教育理論へと統合することに向かっている。ここで「成長」とはいうまでもなく、知識の単なる蓄積（accretion）ではなく、反証と批判にもとづいて誤り、矛盾、また不適切なものをとり除いていくことである。したがって、この過程には前もってさだめられたゴールとか目的はないのである。

かれのこうした教育史的叙述というべきものについて、筆者は評価をくだす立場にいるわけではないが、個人的にはルソーやスキナーについて語っていることから啓発を受けたことは記しておいてもよいだろう。ただし、ここでひとこと言っておきたいのは、パーキンソンは、ピアジェ、スキナー、モンテッソーリ、ニール、ロジャーズにそれぞれ章（part）を割り振って論じていながら、デューイには章を割くことはなく、わずかにところどころで言及しているにすぎないということである。これは、評者のごとく、高等学校の「倫社」以来（つまり、戦後教育のまっただなかで）デューイのことを教えらえてきた者としては、不可解な感じがするところである。パーキンソンの理解では、デューイは進化論の枠組みのもとで誤りから学ぶことと子供の成長を教育の課題としていたにもかかわらず、誤りに対する正しい答え——つまり、教育の目標——を教師が「伝達」という・「印刷」メタファーに捉えられていたということになる。パーキンソンによれば、そしてポパー哲学を知っているものには自明のことながら、実験とは理論の真なることを正当化することではなく、反証することなのだ。デューイはそれを誤認していたというわけである。デューイは先行者の知識が次代に印刷されていく——たとえ、実験をつうじてであれ——と考えるかぎり、進化論を知っているにもかかわらず、ラマルクの進化論者だとうことになる。筆者は、デューイについてこうした議論を正確に判断しうる者ではないが、デューイとポパーとの知的比較といったことはなお研究されてよいのではないだ

ろうか、と思う者である。

さて、パーキンソン自身は進化論的認識論（実質的にポパーの反証主義的認識論）を実地の教育に応用することを考えている。このときかれは、教育の環境は「自由（free）」であること、「応答的(responsive)」であること、そして「支援的(supportive)」である必要があると主張する。そのなかで、生徒像、教育内容——これは問題の提起ということになるのだが——および教師像が再把握(reconceptualization)されねばならないと主張している。これらの概念をより詳しく説明し、なおかつ批判にこたえているのが、『**教師にゴールなし、生徒に目的なし**』である。

この本によれば、教育環境が自由であるとは、生徒がみずからの技能とか知識（仮説とか思いこみ）の水準や状態を素直に表現できるような環境のことである。生徒は自由にかつ率直に自分を見せることのできる環境におかれる必要がある。また教師は生徒がそうできるように接しなければならない。

「応答的(responsive)」環境とは、「批判的」環境とも呼ばれているが、教師が頭越しに生徒を間違っているなどと決めつけるのではなく、生徒の思い込みや技能から帰結としてなにが生じるかを見て取れるようにしてやれる環境のことである。そのためには教師は、生徒の人格とパフォーマンス（仮説や思い込みやその時点での技能からの帰結）とを区別して、パフォーマンスに対してのみコーチの役割を果たす必要があるとされている。ここでの基本ロジックは否定式(modus tollens)であるとされている。

「支援的(supportive)」環境とは、生徒がみずからのスキルや仮説の修正を教師のサポートのもとでおこなうことのできる環境のことである。教師は、見本とかモデルを提示してそれを反復強制のもとで生徒に押し付けるのではなく、生徒が自らの試行錯誤のもとで、スキルや仮説を改善していくように促すことが求められている。つまり、

教師はゴールを押しつけるのではなく、生徒が自ら成長する(self-education)ように促すべきなのである。

パーキンソンは、もちろん、ポパーの三世界論を受け入れている。かれの場合、この理論は、生徒と教師とのあいだの信頼を築く基礎理論として捉えられている。つまり、批判の対象となるものは、世界3の対象、つまり言語的に表現されたもの、あるいはパフォーマンスにおいて体现されているものであって、個人の心（精神）という世界2に属するものが批判の対象になるわけではない。パーキンソンは、このような峻別によって、生徒を温かく見守り、自発的成長を促すのが教師の課題であると考えている。パーキンソンはこうした教育理念あるいは教育哲学をモダニズムおよびポストモダニズムへの批判をつうじて語っている。

モダニズムというのは、すでに言及しておいたが「印刷」メタファーで教育をとらえる立場であり、まさに「近代」——ここでは簡単にしか書けないが、パーキンソンは宗教が教育を担い、大衆の社会化を目指した時代として捉えている——というものに歩調を合わせて成立してきた。だが、モダニズムという教育哲学は、過ぎ去った過去の遺物ではなく、多くの教育現場でわれわれの教育観を支配しているというのがパーキンソンの議論の中心にある考えである。かれによれば、モダニズムは知識を外部からすりこむために知識を正当化する必要に迫られるのであるが、それをはたしえないがゆえに権威——人物であれ、観察であれ、実験であれ——に頼ることになり、結局のところ、教育を権威主義的なものにしてしまうという弊害をもつのである。

ポストモダニズムとは、パーキンソンの考えでは、正当化の存在しないことは自覚しており、したがって権威に正当化を求めることはしないのだが、別のルートをたどって「正当化」をおこなおうとする立場である。パーキンソンによれば、

かれらは、知識を語っている言語の意味——言語ゲームがなされているという事実——に根拠なるものを求めるとされる。つまり、知識を支える意味は、ウィトゲンシュタインふうに言って言語ゲームによって規定されているのであり、まさにそこ（言語ゲーム）にこそ存在するものなのである。言語ゲームが異なれば意味も異なり、したがって知識も異なるという。ここにあるのは生活形式の相対性であって、真理の観念（規制観念としての真理）は消失している。パーキンソンは、こうした思想の下で教育の場において言語ゲームを押しつける権力を暴き出し批判しなければならないと考えるに至ったのがポストモダニズムであると解釈する。結局のところ、ポストモダニズムにとって教育とは政治闘争になるとパーキンソンは考える。かれはつぎのように言っている。

「ここにおいて、大部分のポストモダン思想について言えるように、記述が説明にとって代わる。その記述を受け入れるか捨てておけ、というわけである。したがって、根本において教育は、ポストモダンの教師の手のもとでは、政治的活動となる。権力をもっている人がそうでない人に言語ゲームを課すというわけだ。これが教育というわけだ。」（p.54）

しかし、こうした考えをするのであれば、ポストモダンの教師が勝利した場面では新たな *status quo* が発生するのみであって、それは政治闘争の対象にしかならないことになる。つまり、かれらは教育を政治闘争にってしまうだけで、真理を忘れていているということだ。

パーキンソンは、モダニズムとポストモダニズムを批判したあとで、もっとも重要な問題であるカリキュラムの問題に向かっている。

カリキュラムは膨張する。とりわけ民主主義社会では、多種多様なマイノリティ・グループはみずからの文化や習慣が教育されるべきことを要

求しうるわけだから、カリキュラムの膨張は避けがたいであろう。しかし、学校が予算や人員の希少性のゆえに対応できないこともまた明白である。ここにある問題の解決策としてパーキンソンが考えているのは、マーケットにおける学校の自由な競争ということである。カリキュラムを自由にし、生徒（および保護者）の側からの学校選択の自由を拡大すれば、不要な科目は淘汰されるとパーキンソンは考えている。こうした考え——とりあえず、ここでは学校の自由化と呼んでおく——に対して、当然のことながら提起される反論は、そのようなことをしては社会のきずなが壊されるという批判であろう。この批判は、強固な絆は人びとを団結させる強固なイデオロギーがあるところで成立するという前提を置いているのであろうから、パーキンソンのみならず、評者にも受け入れがたい考えである。パーキンソンの基本的な返答は、真のきずなをつくるのは、推測と反駁にもとづく批判的アプローチそのものであるという・ポパー的な返答である。

わたくしはこの返答に異論を唱える者ではないが、パーキンソンの答えはもっともっと練り上げられる余地があるのではないかと思う。以下、日本に住む者としてのたんなる感想でしかないが、評者の未熟な考えをほんの少しだけ述べてみたい。わたくしは、義務教育という縛りを大幅に緩め、いわゆるホーム・エデュケーション（親が自分の家庭で子弟の教育をするといったこと）を全面的に解禁してはどうかと思う。とりわけ、公立学校でなされる義務教育なるものは、時間を無駄に使いすぎていると思うし、生徒を集団生活なるものの規律に縛りつけすぎていると思う。さらにそこでのいじめなどの犯罪の発生は、統計を研究したわけではないが、医療事故や交通事故の発生件数よりも多いのではないか。

本稿は、ホーム・エデュケーションを論じるものではないので、これ以上この点に触れるつもりはない。（もちろん、評者は猛烈な反論が寄せら

れることを自覚しています)。しかし、評者は、パーキンソンがこうした問題にも踏み入っていたならば、われわれの時代における教育の問題点を進化論的認識論の立場からより照らし出すことができていたのではないかと考える。しかし、そうした課題は、義務教育を自由への圧迫として捉えるリバタリアンによって論じられるべきもののだろう。

ところで、この本の第四部では、三人の批判者がパーキンソンを批判し、それに対してパーキンソンが応答している。

Peter W. Airasian は、ゴールは必要ないというパーキンソンの主張を問題にする。Airasian は、ゴールは学習過程における目標点を定めるものであるから、教師と生徒の自己評価にとって役立つと考える。また、保護者は客観的な評価を要求しているのであって、生徒個々人の達成度についての教師の判断を要求しているわけではないとかれは言う。また教師にしても、前もって教材を準備するとき、同時にどう教えるか、生徒における何を不適切なもの、改善されるべきものと見るのかの規準を立てているわけで、それは実質的にゴールを立てていることだと批判する。

こうした批判のほかにも Airasian は、実験における安全規則とか首都名などといったものは非推測的知識であってパーキンソンの説くクリティカル・アプローチにそぐわないと主張する。しかし、評者にはこの点に堪してはむしろ Airasian の側に誤解があるのではないかと思われる。

また、Airasian は、認知的知識 (cognitive knowledge) と区別して感応的知識 (affective knowledge) というものを考える。このことばで言わんとしているのは、生徒が感じとるような、励まされているとか支援されているといった感じ、あるいは自由でいられるといった感じのことであるように思われる。たしかに認知的知識は言語によって客体化されうるものであるから、ポパ

一の三世界論の枠組みにそして進化論的認識論の枠組みにおさまるものであろう。しかし、Airasian は、感応的知識はじっさいの教室においては重要であると考え、これはどのようなものなのかという問いを投げ、批判的教育 (critical pedagogy) の過程にどのような影響を与えるかと問いかけている。

評者の見るかぎり、パーキンソンが感応的知識といったものについて主題邸に論じていないのはたしかである。しかし評者は、言語四機能説を応用すれば、Airasian の問いに答えることはそれほど難しくないのではないかと思う。つまり、言語の第一の機能である表出機能、それから第二の機能である信号機能というものに依拠して人間の感応的部分を説明し、それを教育理論の中に組み込んでいくことは難しくないのではないかと思う。しかし、これを教室という場面に即応するように理論化していくことは、教育の理論家に任された課題であらう。

他方で Airasian は、パーキンソンの語るようなクリティカル・アプローチの理念は教師に困難な課題を投げかけると指摘する。ひとつは、教師が生徒における人格とそのパフォーマンスを的確に峻別できるかという問題である。Airasian は、教師はかならずしも情動に左右されない (dispassionate) 観察者ではないのだから、これは困難な課題ではないかと考えている。またかれは、教師がクリティカル・アプローチから課せられる要請にどこまでこたえられるかも疑問であるとする。たとえば、自由で応答的で支援的な教室環境を作り出すことは一朝一夕にはできないことであろうし、また、教師がことごとくについて十分かつ繊細な感受性を発揮して批判能力を高められるかも問題であると考えているようである。要するに、Airasian はクリティカル・アプローチの理念としての卓越性は認めつつも、現実の教室環境でそれを実現することの困難さを指摘しているように思われる。

Joel Spring は、ポスト・モダニズム的観点からパーキンソンを批判しているが、評者には一方的な断言が多すぎると思われる議論をしている。つまり、かれによるとパーキンソンには、権力と知の関係に関する考察がないのであり、そしてこの関係を考察するならば市場での競争、批判的対話といった考えは変化せざるをえないというのである。

かれによれば、中世では教会がその体制にフィットするような知を規定していた。また現代でも「じっさい、企業は合衆国においては、労働組合が労働者の仕事と生活の条件の改善に寄与する役割をになっているという信念を鎮圧することによりかなり成功してきたと思われる」(p.95)。かれは、生存する知識というものは、最適なものではなく、力関係の衝突を生き抜いたものである、と言うのである。

さらにかれによれば、学ぶに値する知識を決めているのは、純粋なマーケット過程ではなく、国家標準と達成度テストのなかみを規定する政治的諸力である。市場は中立的であるわけではない。富の偏在とか宣伝といったものが市場を支配する。学校のフランチャイズ化も進行する。それらは自分たちの経済的利益を守るような知識（歴史、経済、政治）の伝播を試みる。個人の力の限界をパーキンソンは知っているのか、と Joel Spring は批判するわけである。知と権力との関係についての十分な考察のないところでのパーキンソン流の教育はあやうい。知識はむしろ社会的関係の産物である。研究の方向を定めているのは、政治的決定である。第二次大戦後におけるアメリカの科学研究の方向は軍事であった。

結局のところかれは、知をたんなる仮説として提示するだけでなく、力関係の表出であると提示することによって批判を促すことができる、と主張するのである。

しかし評者は、こんなことを、大学院生相手ならともかく、生徒に対してほんとうにできるのか、

と思う。Spring は、権力の再配分が必要だと考える。しかし、その実行は、評者には、知識と力との関係を教えるというかたちで、学校というものを政治闘争の場とすることではないかと思う。

Juan Burstyn はフェミニストの立場からパーキンソンを批判する。彼女によると、パーキンソンの理論は古い。階級、人種、ジェンダーが教育に及ぼす影響、テクノロジーの進展を考えず、教室の中立性というものにしがみついている、という。彼女の議論もまた Airasian とおなじように、教室の現実を踏まえればパーキンソンのクリティカル・アプローチは理想に走りすぎていると指摘しているように見える。

彼女によれば、批判に対する生徒の受容性は心理的社会的要因が大きく左右されるのであってたんに論理的な否定式の問題ではないというわけだ。つまり、生徒たちは自分の考えが確証され受容されるまで批判を受け容れないのだから、教師は批判する前に生徒を受容することが大切だ、というのである。また教師は、生徒とのかかわりにおいて偏見に染まった目で見ているのであって、パーキンソンが想定するような成長への facilitator として接しているとは限らない、とも指摘するのである。

Burstyn によれば、教師には、生徒の誤った知や技能を批判する前に、どのくらいの期間それらを受け入れるべきかという問題が存在するとされる。何歳くらいになったら批判をしてもよいか。こうした点についてパーキンソンは十分な注意を払っていない、と彼女は言う。さらに彼女は、ポスト・モダニズム的文脈とは異なり、心理学的な文脈において「パーキンソンは、大人と子供、教師と生徒とのあいだの不平等な力を、階級、人種、ジェンダーにもとづく力の差というものを無視している」とも言っている。彼女によれば、こんにち、科学技術の発達のもとで、生徒は試行と誤り排除を仮想空間（マシン）でおこなうのか、生身の人間とおこなうのかという問題が生じて

いる。実在の意味が変わってきていることは、将来の教師に対する挑戦である。試行と誤り排除による知の成長は、用いているテクノロジーがほんとうのデータを提供してくれるという信仰のうえに成立している。それを考える必要があると **Burstyn** は主張するのである。

こうした批判に対するパーキンソンの返答の要点をまとめておきたい。

パーキンソンによれば、**Burstyn** は試行と誤り排除による知の成長に反証を突き付けているわけではないし、技術の発展は、むしろ、試行と誤り排除の過程を促進するとも考えられる、と返答している。

Spring に対しては、進化論では、生存——種の存続ということだろう——という規準がたてられているのみであって、権力のなかでの知という規準がたてられているわけではないという趣旨の返答をしている。ダーウィニズムはそうした前提は立てていないという。(評者の見るところ、**Spring** の語る「権力」の観念には、曖昧さがあるように思えるので、パーキンソンはこのように返答しているということなのだろう)。

Burstyn に対しては、彼女の主張、つまり、生徒は自分が十分にサポートされていると感じないかぎり、エラーを除去しようとしないうし、生徒は教師が自分の側にいると信じるときに、エラー排除をする、という主張を認めつつ、しかし、だからといって **Burstyn** のように「子供が学校にもちこんでくる技能や理解を確証」(p.107) しなければならないということにはならない、と返答し、人格とパフォーマンスを区別することが大事だ、と答えている。

Airasian に対しては、「標準化された評価はクリティカル・アプローチと衝突する」と考える必要はかならずしもないのであり、クリティカル・アプローチを採用した教師は、生徒を標準化されたテストによって評価してもらうこともできるし、そ

の結果を伝統的結果を受けた生徒の成績と比較してもらうこともできる、と答えている。そして、そうした実験は、クリティカル・アプローチが成長を促していることを明らかにするだろうとパーキンソンは考える。そして、標準的評価のようなものを無用にするだろうと考える。ゴールを設定する代わりに、アジェンダを提供すべきだとパーキンソンは考える。こうした実験はクリティカル・アプローチの受容を促すだろうと主張している。

パーキンソンは、テストとグレーディングはクリティカル・アプローチと両立しないわけではないが、テストというものをクリティカル・アプローチを漸進させる方向で根本的に変革する必要があるし、それは可能だと主張している。テストは診断的なものになるべきで生徒の現在の知識の欠陥を明らかにするようなものにする必要があるし、グレーディングは、生徒の作品におけるエラーの減少にもとづくべきだ、と主張している。しかし、評者には、テストというものが生徒のランク付けに用いられているという現実のもとでは相当に困難な課題であるように思われる。かれは、生徒はすでにして試行と誤り排除の過程に従事しているのだから、通常の教師でもクリティカル・アプローチを利用できる、と考えるのである。教師は、教育についてのコンセプトを変革する必要がある。それによって、遭遇する様々な問題に対処できるはずだ。教師も相互批判をすべきだ、かれは主張する。

学ぶに値するものは何か、という問題にかんしては、パーキンソンはその答えを知らないという。かれによれば、マーケットはなにが学ぶに値しないかを決めるだけである。自由に学校を開設でき、自由に学校を移れることが重要であるという。〔しかし、日本に住む者としては、現実にそんなことができるのだろうか、という疑問を呈せざるをえない。〕

パーキンソンによれば、**Spring** はこうしたマー

ケット型アプローチを否定し、力の不均衡は free choice を可能にするわけではない、と主張したのだが、アメリカの自動車メーカーは日本勢に敗れたではないか、と述べ、自由市場の淘汰機能に信頼を寄せている。さらに、Spring は、学ぶに値するもの（力関係）を知っているとパーキンソンは批判する。パーキンソンによれば、Spring のやり方はクリティカル・アプローチを破壊するものである。それは、人間の可謬性を考慮に入れていない。クリティカル・アプローチは、確定された知識といったものには到達しない。われわれの無知を暴くだけだ、とパーキンソンは主張するのである。

以上できわめて不十分なレビューを終える。最後に評者の感想を二つ述べておきたい。評者はポパー哲学を学んで以来、これは教育の在り方を大きく変える哲学であると考えてきたが、それを現実の教育にどう適用するかという問題はほとんど考えずにきた。ありていに言えば、ポパー的教育哲学の理念に酔っていただけである。いまパーキンソンの書物を読んで現実にポパー哲学を適用することの困難さに気づかされるとともに、パーキンソンが、教室環境は自由で応答的で支援的であるべしという理念を掲げていることを高く評価するとともに、かれの努力に敬意を表するものである。

他方で、これは二つ目の感想ということになるが、パーキンソンがポパー的進化論的認識論のひゆ的性格——評者の著『ポパー 批判的合理主義』（講談社、一九九七年）で触れておいた——にまったく批判的注意を払っていないことには危惧の念を抱かざるをえない。進化論的認識論のひゆ的性格が露わになるところで、その教育哲学としての限界も露呈することになるのではないだろうか。たとえば、進化は遺伝子プールという種のレベルでの変化であり、そしてその変化は個体における変異によってもたらされるという考えは、進化論のセントラル・ドグマに属すると思うのだが、遺伝子プールに相当するものは、教育の現場においてはなんなのだろうか。評者の目には、パーキンソンは進化論的認識論というものをあまりにも個人レベルで考えていて、主のレベルに相当するものを十分に考えているようには思えない。もし生物進化論から個体と種の関係についてなんらかの洞察が得られるならば、それは進化論的認識論にもとづく教育哲学を大きく前進させることにはならないか。評者は、こうした点についてのご教示をえたいものと思っている。それは、ポパー哲学の前進をもたらす糧となるのではないだろうか。

☆☆

碧海純一先生のご逝去と追悼シンポジウムの報告

嶋津 格

わがポパー哲学研究会の創設時から代表を勤めてくださった碧海純一先生が、昨年（2013

年）7月18日に、89歳で逝去されました。嶋津はその前日の夕方、ご入院中の都立大塚病院にお見舞いに行ったので、そのまま病室に居させていただき、当日早朝のご臨終にご家族といっしょに立ち会いました。先生はその年の春に脳梗塞で倒れられ、結局そのまま意識は戻りませんでした。入院中には、一時バイタルも改善して自宅に戻れ

そんな兆候もあったのですが、叶いませんでした。

お葬式はお身内だけで済まされましたが、追悼のシンポジウムの計画を東京大学の井上達夫教授が中心になって進めて下さり、9月28日に東大構内の山上会館で「碧海先生追悼シンポジウム」が開催されました。ポパー研の中には興味をもってくださる方もいらっしゃると思うので、その内容を以下に報告させていただきます。

参加者は山上会館の大きな会議室にほぼ満席だったが、各自の入場時に40頁ほどの資料が手渡された。中には、先生の略歴と著作のリストなどの後に、以下のポパー関連の文書の写しが綴じ込まれていた。

1. 1993年10月27日に碧海先生からカール・ポパーに出した英文タイプ打ちの三枚の手紙と、同年11月1日付けでポパーから来た手書き二枚の返信のコピー。

内容は社交的なものにとどまらない。碧海先生の手紙は、ネアンデルタール人の葬送の儀式は魂信仰を前提にしており、魂は直示的に示せないからそれを説明するメタ言語を伴ったはずだ、というネアンデルタール人の言語に関する独自の仮説を述べている。ポパーの返信はこれを、十分に単純で人の見方を変える力をもつ仮説だ、として高く評価した後で、可能な反論の例を挙げている。それはホメロスでさえもまだ、我々のような心と身の区別をしていなかったとするシュネルという古典学者の説である。心身の区別論は、その後の詩人たちによって、徐々に練り上げられていった、とシュネルはいうのである。ポパーはその出典を詳しくあげながら、しかし自分も『自我とその脳』の中で、シュネルの名前は出していないが『オデュッセイア』の言葉を引きながらこの説に反対している、と述べている。ただ、ギリシャの文献には、息、血、血の蒸気という三つの魂の区別があり、魂は形而上学的なものとなる以前には気体と考えられていた可能性がある、とも言

っていて、晩年のポパー（1994年9月17日没）が碧海先生との議論を楽しんでいる様子が読み取れる。手書きの字は、大きくて比較的読みやすい。

2. ポパー・レターの創刊号（Vol.1.No.1、1989年12月号）に碧海先生が書いた「日本ポパー哲学研究会発足に当たって」と題する文章。これも先生の基本姿勢が出ていて重要だ、という判断で資料として入れられたもの。

3. ポパー・レターVol.6.No.2（1994年11月号）に出た、碧海先生執筆の英文のポパーへの弔辞（Funeral Address）と、当時のポパー研代表である濱井修先生の「サー・カールと碧海教授」という文章。

4. 関東学院大学法学部ゼミナール連合会機関誌という一般の目に触れにくいところに先生が書いた「象徴天皇制と昭和天皇」という文章。ここでは先生は、昭和天皇の人柄を称えながらも、長期的には天皇制は廃止すべきだ、と論じている。

5. 小林直樹名誉教授が1990年にジュリストに書いた「尾高朝雄と若き学徒たち」という文章。そこには、正確な年月は不明だとしながら、尾高先生自身（1956年ペニシリンショックで急死）と、その下で法哲学を学んでいた碧海先生を含む6人の学生たち（尾高門下生はもっと多いが）の写った大きな写真が出ている。

追悼シンポジウムは2部構成になっていて、「第1部：碧海先生の学問と思想」の報告者・テーマと簡単な報告内容は以下のとおり。

・長尾龍一「科学哲学としての碧海法哲学」

碧海先生はご両親を早く亡くされたが、学生時代に東京裁判の弁護側の裁判資料の英訳というアルバイトをされていたこと（ちなみに、当時の部下の一人が美代子夫人）。16・7歳ころ、「日本語で書かれたものはみんなインチキだ」と考えて外国語の書物を読みふける哲学青年だったこと。などの興味深いエピソード。ラッセルからウィーン学団、ポパーへと進む思想遍歴。自然科学を想

定する科学方法論を中心とする碧海哲学は、規範を扱う場合に弱点があること。など

・嶋津格「明晰さの探求は成ったか」

不明晰なコケオドシの哲学を否定し、明晰さを探求するプログラムとしての碧海哲学。しかしそれを基礎づけるために依拠された論理実証主義は、「形而上学」を無意味として否定するだけではなく、普遍命題からなる科学法則の認識をも目論見に反して排除してしまうこと。以後、論理経験主義、ポパー哲学へ。それでも一般に、認識論によって論敵を排除することが可能かには疑問がある。碧海哲学が許容する範囲からの「近き外部へ」として、アリストテレス、ヒューム、ハイエク、オークショットに、「不詳の弟子の彷徨」として言及。

・井上達夫「碧海法哲学の内的葛藤」

価値のメタ理論として碧海先生は価値相対主義または価値情緒主義（つまり非認知的価値論）を採用する。しかしポパーの可謬主義は、価値判断についても誤りの可能性を前提にしてそれを批判に晒そうとする。ここには、正解の存在を想定する認知的価値論がなければならない。それゆえ碧海法哲学は、相対主義と可謬主義という二つの立場に引き裂かれている。井上教授はその後者、価値問題にも正解を想定する立場に、碧海先生も立つべきだった、という。

また「第2部：碧海先生の思い出」として、

以下の方々が碧海先生の生涯との接点を話された。

- ・樋口陽一（東京大学名誉教授）
- ・太田知行（東北大学名誉教授）
- ・濱井修（東京大学名誉教授）
- ・黒田東彦（日本銀行総裁）
- ・松村良之（北海道大学名誉教授）
- ・青木人志（一橋大学教授）
- ・森村進（一橋大学教授）

この中で、黒田日銀総裁は、学生時代に碧海ゼミの門下生であり、その後大蔵省在職中にも碧海純一他訳『批判的合理主義』ダイヤモンド社、1974年、で2本の論文の翻訳を担当されている。また、青木教授は、関東学院大学で東大退官後の碧海先生と同僚だったことがあり、その頃の先生について、エピソードを話された。

なお、このシンポジウムについては、雑誌『書齋の窓』が2014年3月号（第1部について）と5月号（第2部について）で、各報告を掲載する予定である。

資料としてポパー・レターの提供を受けたことについては、開始時に、主催した井上教授からポパー哲学研究会への謝辞をいただいたことも併せてご報告します。

☆☆

日本ポパー哲学研究会 2013 年度会員総会議事録

2013. 8.3（土）

於：日本大学文理学部キャンパス本館会議室 C

I. 2012 年度活動報告

・第23回年次研究大会開催

於：慶應義塾大学三田キャンパス研究室棟1階A会議室

統一論題『ポパーとハイエク』

自由論題：なし

- ・機関紙『批判的合理主義研究』Vol.4，No.1，No.2 発行。

Ⅱ．入退会者、住所変更

- ・入会者 なし
- ・退会者 2名
荒井大介氏 (2012年6月2日)
内田詔夫氏 (2013年1月23日)
- ・住所変更 小河原誠氏
新：〒311-4143 茨城県水戸市大塚町 1852-78 050-7524-3485
杉本滋氏
新宿区荒木町 12 プランベルジュール 101 (2013年7月1日より 2013年12月31日まで)

Ⅲ．決算報告

＜資料1＞参照

Ⅳ．今後の年次研究大会について

- ・場所：慶應義塾大学三田キャンパス
- ・日時：8月2日（土）

Ⅶ．その他

- ・機関誌投稿のガイドラインについて

機関誌の電子ファイル配信に伴い、原稿の投稿に際しての電子書籍用ファイル作成のガイドラインを作成し、機関誌にて発表することとなった。

＜資料1＞

◆2012年度会計報告(2012.4.1－2013.3.31)

収 入	金 額	支 出	金 額
前 期 繰 越 金	258,981	会費振替手数料等	2,280
会費収入	186,000	第23回年次大会関係(慶應大)	
機関誌販売収入	2,450	懇親会費(9名)	60,000
第23回年次大会懇親会収入	65,000	アルバイト代(3名)	15,000
		大会準備費(郵送、コピー等)	866
		講演会謝礼(3名)	30,000
		機関誌作成費・郵送費等	
		第4巻1号印刷費	69,300
		同 郵送費等	11,138

		第 4 卷 2 号印刷費	74,550
		同 郵送費等	7,950
		次 期 繰 越 金	241,347
計	512,431	計	512,431

以上の通り報告致します。 2013 年 8 月 3 日 事務局 会計担当 富塚嘉一(中央大学)
監 事 渡部直樹(慶應義塾大学)

批判的合理主義研究（通巻 10 号）

2013 年 12 月発行

本誌は、『ポパーレター』（1989～2008,
通巻 38 号）を改題し、継承したものです。

発行人 小河原 誠

編集・発行 日本ポパー哲学研究会事務局
機関誌編集部

〒311-4143 水戸市大塚町 1852-78

TEL. 050-7524-3485

Email: kogawara79@hotmail.com

入退会・名簿変更、会費徴収・会計管理に
関しては、「日本ポパー哲学研究会事務局組
織・会計部」にお願いいたします。

〒162-8473 新宿区市谷田町 1-18 中央
大学大学院国際会計研究科富塚研究室 1402
号

Tel. 03 (3513) 0415

Fax. 03-3513-0319

Email: h00370@tamacc.chuo-u.ac.jp